

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 206, 2026

## VIEW 展望

日本の実験映画・ビデオアートのアーカイブ化の状況／阪本 裕文…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 研究企画委員会…3-4 機関誌編集委員会…4

映像表現研究会…5-6 映像テキスト分析研究会…6 映画文献資料研究会…7

アニメーション研究会…8 映像心理学研究会…9

クロスメディア研究会…10 アナログメディア研究会…11-13

ドキュメンタリードラマ研究会…14-17 アジア映画研究会…18

写真研究会…19 映像人類学研究会…19-20 映像玩具の科学研究会…21-23

関西支部…23-24 中部支部…24-25 西部支部…25

## FROM THE EDITORS

編集後記…25

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 206 号」2026 年 5 月 15 日発行

発行人：黒岩俊哉 編集担当／総務委員会（常石史子・藤井仁子・北市記子）

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内

e-mail：office@jasias.jp <https://jasias.jp/>



日本映像学会

# 日本の実験映画・ビデオアートのアーカイブ化の状況

阪本 裕文

本稿は、ここ10年間の日本の実験映画・ビデオアートのアーカイブ化の状況を、私の知る範囲で整理するものである。この10年間で日本の実験映画・ビデオアートのアーカイブ化は着実に進展してきた。このような実践において特徴的なのは、ゆるやかな協力関係のもと、小規模な組織や個人によってアーカイブ化が推進されている点である。もちろん国内における公的なフィルムアーカイブである国立映画アーカイブ(NFAJ)や福岡市総合図書館映像資料部門、各美術館でも、実験映画やビデオアートの受け入れは行われている。しかし、それらは基本的に寄贈を前提とした収集にならざるを得ず、実験映画・ビデオアートの歴史を補完するような能動的なアーカイビングは、小規模な組織や個人によって担われている。それは、アメリカにおけるAnthology Film Archivesのような、この領域の作品保存に特化した組織が存在しない、国内の条件を反映したものだといえる。

筆者が一員として関わるNPO法人戦後映像芸術アーカイブ(PJMIA)は、この10年間、松本俊夫と相原信洋のアーカイブ化に取り組んできた。松本作品に関しては、主要な作品のニュープリント作成とデジタル化はすでに完了していたが、さらに初期のPR映画や記録映画の所在調査が進められ、スポンサー企業やフィルム所蔵元の許諾のもと『マンモス潜函』(1957 | 16mmプリント)、『伸びゆく力(改訂版)』(1958 | 35mmネガ)、『春を呼ぶ子ら』(1959 | 16mmプリント)、『安保条約』(1959 | 16mmインターネガ)、『白い長い線の記録』(1960 | 35mmネガ)、『ニチレ・ア・ラ・カルト』(1963 | 16mmプリント)のデジタル化作業が実施された。また権利会社の許諾のもと、後期の重要作品である『氣 KI or BREATHING』(1980 | 16mmネガ)のデジタル化作業も実施され、現存するほぼ全ての作品のアーカイブ化は完了したといえる(松本俊夫コレクションサーベイを参照 | <https://pjmia.wordpress.com/collection-survey-the-original-camera-negatives-by-toshio-matsumoto/>)。なお、松本作品のフィルム原版については、現存する作品の殆どが作家の生前から国立映画アーカイブに収蔵されている。相原作品に関しても同様に、現存する作品のニュープリント作成とデジタル化は完了しており、フィルム原版についてはNFAJに寄贈手続き中である。その他、PJMIAでは中井恒夫や、新しい取り扱い作家のアーカイブ化にも取り組んでいる。

瀧健太郎氏によるビデオアートセンター東京(VCT)は飯村隆彦の作品のアーカイブ化に取り組んでおり、飯村作品のフィルム原版とビデオテープの整理とデジタル化を進めている(飯村隆彦アーカイブ準備室を参照 | <https://vctokyo.wixsite.com/info/preparatoryofficetakhikoiimuraarchiving>)。近年の大きな成果としては、飯村とアルヴィン・ルシエの共同制作によるエクспанデッドシネマ作品『シェルター9999』(1967)を、Labor BerlinやCollaborative Cataloging Japanとの協力のもと復元し、European Media Art Festivalなどで再演したことが挙げられるだろう。飯村作品のフィルム原版は遺族が保管しているとのことで、重複のあるプリントは東京都写真美術館に収蔵された。その他、VCTは中島興、山本圭吾、和田守弘の作品のデジタル化に協力している。

鈴木章浩氏によるUNDERGROUND CINEMA FESTIVAL(UCF)は、2021年から開催されている1960年代以降のアンダーグラウンド映画を取り上げる映画祭であるが、ここで上映されたおおえまさのり、中村雅信、居田伊佐雄、The Other Film Organization(伊静亜伊、フィルム・

シンジケート、MAJYOLICAなど)の作品は、映画祭の開催に際してデジタル化されたものであり、アーカイブ化と上映が一体となった活動を見せている。また、UCFは岡部道男のフィルム原版のデジタル化も実施しているほか、作家の希望によって、フィルムを福岡市総合図書館や東京都写真美術館に寄贈するための仲介も行っている。

Kraut Filmは、まだ学術的な研究対象になっていない1970年代以降の実験映画作家のアーカイブ化に取り組むという方針を掲げたレーベルであり、国内各地のフィルムサークルの調査を進めているほか、現在までに黒澤潤、浅野優子、島由美、ほしのあきら、松下正己、古館徹夫、関根博之、大川戸洋介、藤井晴美のデジタル化を実施している。また、黒澤と大川戸の作品についてはBlu-rayとしても出版している。(公式サイトデータベースを参照 | <https://krautfilm.jp/database/>)

公的なフィルムアーカイブや美術館について、ユニークな動きを見せているのは東京都写真美術館であり、「エクспанデッド・シネマ再考」展(2017)をはじめとする展覧会に出品された作品が収蔵されるケースが目立つ。その多くはプリントであると推察されるが、同館の目録を参照すれば各年度の収蔵作品を確認することができる(宮井陸郎のフィルムを収蔵していることは特筆しておきたい)。

そしてフィルム原版の最終的な保管を担うことになるのは、やはりNFAJもしくは福岡市総合図書館となる。まず福岡市総合図書館の近年の状況について述べると、同館は岡部道男の全作品については、『クレージーラブ』(1977)はネガとプリントで、それ以外の作品は全てプリントで収蔵している。また、おおえまさのりの全作品については、全てデュプネガとプリントで収蔵している。次にNFAJだが、同館は特集上映「発掘された映画たち」において収蔵されたフィルムを上映しており、それを確認すれば状況は把握できる。近年であれば、2018年の特集で上映された岩佐寿弥の『叛軍 No.1』~『叛軍 No.3』(1970~1971)をプリント(原版扱いとしてここからネガも作成)で、『叛軍 No.4』(1972)をネガで収蔵している。また2026年の特集で上映された奥村昭夫の『三人でする接吻』(1968)をネガで、『猶予もしくは影を撫でる男』(1967)と『狂気が彷徨う』(1970)をプリントで収蔵している。他にも時期は不明だが、北村皆雄の『白い影への対話』(1963)や『神屋原の馬ノカペールの馬』(1969)などの作品をネガで収蔵している。

これら以外に、私に関心を持つ個別の作家について付け加えると、シュウゾウ・アヅチ・ガリバーの作品は、作家本人と美術館関係者が、現存する全てのフィルム原版のデジタル化を完了させている。金坂健二の作品については、Harvard Film Archiveが『ホップ・スコッチ』(1968)のデュプネガを収蔵しており、2017年にデジタル化が行われた(金坂の他の作品については、目黒区美術館と東京都写真美術館にフィルムが収蔵されている)。

この概観だけでも、1970年代までの主要な実験映画作家やビデオアーティストの仕事は、かなりの部分がカバーできていることが分かるだろう。これは、日本の実験映画・ビデオアートのアーカイブ化が、構想を語る段階から、実践の段階に移行していることを示している。歴史的な全体像は、個々の作品へのアクセスを可能な限り増やすことによってしか担保できない。本稿が、今後のアーカイブ化の展望を考えるうえでの材料になるのであれば幸いである。

(さかもと ひろふみ/松山大学)

## 総務委員会

藤井 仁子

総務委員会より、会員のみならず全員に関わる3つのご連絡です。(1)は今導入した新しい試み、(2)と(3)はこれまでも周知に努めてきたものの、残念ながら会員間でいまだ充分に行きわたっていない情報となります。

### (1) 入会申込フォームについて

正会員の入会申込手続きを、専用の申込フォームを使ってすべて電子的に済ませられるように改めました。これは3月22日の理事会での承認を経て、すでに運用が開始されています。学会ホームページの「入会案内」をご覧ください。会員2名の推薦が必要な点は変わりませんが、これにより入会希望者と事務局の双方にとって手続きの大幅な簡素化が見込まれます。

また、入会申込時には、やはり同日理事会にて承認、制定された「日本映像学会倫理綱領」の内容を必ずご確認ください。この綱領も、学会ホームページで全文が公開されています。理事会において制定された綱領ですが、全会員があらためて心に刻むべき重要な内容を含んでおりますので、ご自身を守るという意味でも、ぜひご一読くださいますようお願いいたします。

### (2) メーリングリストでの情報配信について

総務委員会では、会員のみならず企画されたさまざまな催し、研究集会等について、メーリングリストを通じた情報配信のご依頼を多数頂戴しています。活発な研究活動が展開されていることじたいは大変喜ばしいことと考えますが、すべての会員に一斉配信されるというメーリングリストの性格上、また公平性の観点からも、以前から一定の条件が設けられており、条件を満たした情報のみをお届けすることにいたしております。この条件が、われわれの力不足もあり、いまだ充分には知られていないようです。

今回、学会ホームページにも明記するようにいたしました(「活動案内」のページ)、ご依頼の際は以下の3つの条件が満たされているかどうかを各自でご確認いただき、そのことがはっきりとわかる告知文にいただければと、配信までの手続きがより円滑に進むかと存じます。ご協力いただけますと幸いです。

- ① 学会員による企画であること
- ② 他学会の企画ではないこと
- ③ 無料であること

### (3) ホームページでの寄贈本紹介について

これまた広報の不足から周知が進んでいないようなのですが、学会ホームページの「活動案内」、「寄贈本のご紹介」のコーナーでは、会員から学会に寄贈された図書の紹介文を随時掲載しております。会員による最新の研究発信に触れられる貴重な場となっておりますので、ぜひともご活用ください。

(ふじい じんし / 総務委員長、早稲田大学)

## 研究企画委員会

中村 聡史

第52回大会(5月30日(土)、5月31日(日))開催予定、於愛知淑徳大学の発表申込について、2月21日付で理事会から、研究企画委員会にて予備審査を行い、結果を3月18日までに報告するよう依頼を受けた。

期日(2月13日)までに申込があった発表は、研究発表37件、作品発表3件の計40件であり、そのすべての発表概要(指定の発表申込ファイルに記載)を研究企画委員全員で読み、各委員による審査を行った。各委員による概要審査期間は2月22日から3月12日までとし、その審査結果を集約したうえで、3月14日にZoomにて研究企画委員会を開催し、予備審査結果の判定を行った。

審査基準と審査方法は以下のとおりである。※2025年12月理事会にて決定。

### 【審査基準(要点)】

- ・学会の趣旨に沿った発表であること(映像に関する発表であるか等)。
  - ・文字数800字以上1000字以下であること。画像等を挿入する場合は、600字以上800字以下であること。
  - ・日本語の形式も審査の対象になること。
- ※詳細は「第52回大会 第二通信」および「発表申込ファイル」に記載。

### 【審査方法】

各委員が、○(問題なし)、△(要検討)、×(不適当)のいずれかで評価し、研究企画委員会で集約したうえで審議し、以下に記す基準に則ってAからFの種別で判定した。

- A. 採択: 委員全員が「○」で、かつコメントがないもの。
- B. コメント付採択: 委員全員が「○」だがコメントがあるもの、および、委員の過半数未満(1~3名)が「△」だが、審議により「コメント付採択」と認められたもの。
- C. 条件付採択: ①「採択」「コメント付採択」だが、会費未納or新入会員のもの。  
※期日までの会費納入が採択の条件。  
②委員の過半数(4名)以上が「△」、あるいは1名以上の「×」があるが、審議により「条件付採択」と認められたもの。  
※所見をふまえ修正・加筆した概要を再提出することが採択の条件。  
③②のもので、かつ会費未納or新入会員のもの。  
※修正・加筆した概要の再提出および期日までの会費納入が「条件」となる。
- D. 再審査: ①委員の過半数(4名)以上が「△」、あるいは1名以上の「×」があり、審議により再審査が必要であると判断されたもの。  
②①のもので、かつ会費未納or新入会員のもの。
- E. 不採択: 「×」が多数で、審議によって「不採択」が適当であると判断されたもの。
- F. その他: A-Eのいずれにも該当せず、特別な対応が必要なもの。

審議の結果、研究企画委員会による予備審査の結果は以下のとおりとなった。

## 機関誌編集委員会

木下 千花

## 【予備審査結果】

- A. 採択：〔研究発表〕4件、〔作品発表〕0件
- B. コメント付採択：〔研究発表〕27件、〔作品発表〕2件
- C. 条件付採択：①〔研究発表〕1件、〔作品発表〕0件  
②〔研究発表〕4件、〔作品発表〕0件  
③〔研究発表〕0件、〔作品発表〕0件
- D. 再審査：〔研究発表〕0件、〔作品発表〕1件
- E. 不採択：〔研究発表〕1件、〔作品発表〕0件
- F. その他：〔研究発表〕0件、〔作品発表〕0件

以上の結果を3月17日に報告し、3月22日の理事会に諮り、理事会での審議のうえで承認された。

なお、再提出のあった概要については、決められたスケジュールに従って確認、再審査等を行い、4月下旬に、最終的に決定する予定である。

以上

(なかむら さとし／研究企画委員長、日中文化芸術学院)

## ・編集体制

青山太郎(名古屋文理大学)、東志保(大阪大学)、  
岡田秀則(国立映画アーカイブ)、小川順子(中部大学)、  
川崎公平(北海道大学)、韓燕麗(東京大学)、菅野優香(同志社大学)、  
木下千花(京都大学、委員長)、倉石信乃(明治大学)、  
角井誠(早稲田大学、副委員長)、渡邊大輔(跡見学園女子大学)

## ・『映像学』116号の進捗について

6/18 最終入稿、8/6 校了、8/21 発送(予定)

## ①投稿論文

3/15 締切: 論文20本(うち前号からの繰越1本)

4/22 査読締切

\*外部(非学会員)査読者2名(図書研究費10,000円)

## ②巻頭エッセー

イントロダクション「ホラーの行方」：川崎公平

エッセー1：宮本法明

エッセー2：石田由希(外部)

エッセー3：三浦光彦

\*外部(非学会員)寄稿者1名(図書研究費10,000円)

## ・委員会の開催

3/23 第1回編集委員会(Zoom)

4/26 第2回編集委員会(Zoom)

6/9-12 第3回編集委員会(メール稟議を予定)

以上

(きのした ちか／機関誌編集委員長、京都大学)

# 映像表現研究会

奥野 邦利

第19回となった映像表現研究会主催の「インターリンク：学生映像作品展(ISMIE)2025」は、会員が推薦教員となって18校28作品が集まりました。実施の面では昨年と同じように、名古屋会場では対面開催のスクリーニング及び公開トーク。東京会場も昨年に引き続きWEBページでの作品公開とオンラインでの公開研究会を行いました。各会場の報告は以下に記します。

## 【参加校一覧】

愛知県立芸術大学

イメージフォーラム映像研究所

桜美林大学 芸術文化学群 ビジュアル・アーツ専修

大阪経済大学

大阪芸術大学

大阪電気通信大学

九州産業大学芸術学部芸術表現学科

京都芸術大学 大学院

京都精華大学

尚美学園大学 芸術情報学部情報表現学科

情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

成安造形大学 情報デザイン領域

玉川大学芸術学部

東京工芸大学芸術学部

名古屋学芸大学メディア造形学部 / 大学院メディア造形研究科【本年度幹事校】

日本大学芸術学部【本年度幹事校】

文教大学情報学部メディア表現学科

北海道教育大学 芸術・スポーツ文化学科

<名古屋会場> [日程] 2025年12月6日(土)、12月7日(日)

[会場] 愛知芸術文化センター | アートスペースA

2025年12月6日(土)および12月7日(日)の2日間、愛知芸術文化センター(アートスペースA)にて、「インターリンク：学生映像作品展(ISMIE)2025」を開催しました。本企画は、ムービング・イメージ・フェスティバル(MIF)2025の主要プログラムの一つとして実施したもので、来場者数は2日間で延べ531名(全上映プログラムの合計)となりました。

当日は、出品者や関係学生に加え、一般の方々にも多数ご来場いただき、幅広い年齢層の方々には作品をご鑑賞いただくことができました。各プログラムの上映後には、会場に来場された出品者の方々に作品紹介を行っていただきました。また、今年も東京、京都、大阪など遠方から足を運んでくださった出品者や会員の方々が多数いらっしゃいました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

さらに、参加校の教員による公開トークでは、出品者も交えながら上映作品について意見交換を行いました。加えて、今年度は新たな試みとして、出品者と推薦教員による懇親会も開催し、例年にも増して交流を深める機会となりました。



Image Arts and Sciences [No.206, 2026]



[公開トーク | 参加者一覧(五十音順)]

司会進行：伏木 啓(名古屋学芸大学 メディア造形学部 教授)

パネラー：青山太郎(名古屋文理大学 情報メディア学科 准教授)、池田泰教(愛知県立芸術大学 メディア映像専攻 准教授)、伊奈新祐(京都精華大学 芸術学部 名誉教授)、岩崎宏俊(名古屋造形大学 情報表現領域 准教授)、大橋勝(大阪芸術大学 映像学科 准教授)、奥野邦利(日本大学芸術学部 映画学科 教授)、黒田 皇(大垣女子短期大学 デザイン美術学科 准教授)、村田 仁(名古屋芸術大学 文芸・ライティングコース 准教授)、前田真二郎(情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授)、若見ありさ(東京造形大学 アニメーション専攻 准教授)



文責：伏木啓

(ふしき けい/映像表現研究会、名古屋学芸大学)

<東京会場> [学生作品WEBページ公開] 2025年12月16日(火)～2026年1月31日(土)

[オンライン公開研究会] 2026年1月11日(日)

東京会場は会員によって推薦された28作品を、期間を定めWEB公開の上、2026年1月11日(10:00～13:00)に、研究会事務局である日本大学がホストとなってZoomによるオンライン研究会を開催しました。第19回も全国の参加校推薦教員16名のほか、卒業生を含む作者10名が集まり意見交換ができたことは、オンライン開催のメリットだと考えています。

公開研究会については、近年は推薦教員だけではなく、作者はもちろんのこと、会員の皆さんの参加も増え、意見交換も活発になってきていることから、前回よりも実施時間を30分延ばしました。間に10分ほどの休憩を挟みましたが、時間に余裕ができたことで、他校の作者との意見交換が増えたことなど、プラスの面が多かったと思っています。

流れとしては、参加する推薦教員から自校の作品解説と他校で注目した作品について講評を行い、上記のとおり、参加している他校の作者へ質問が飛ぶこともありました。今回も、各校の作品制作に向けた取り組みの違いや、表現技術に対する指導方針の差異なども非常に興味深かったです。

これも近年の傾向ですが、実写(カメラ)を使って記録した現実を、様々な

## 映像テキスト分析研究会

藤井 仁子

コンセプトで再構成(アニメーションを含む)するメタ的傾向と表現の多義性は、学生作品として現れているだけでなく、指導者であり、評価者でもある我々の批評言語の更新にもつながっているように感じました。特に今回は、生成AIを利用した作品も複数登場したことで、意見交換の中でも、生成AIを構造映画の系譜で捉える視点の面白さなど、新たな議論を求める声も寄せられました。

なお、学生作品のWEBページ公開(参加全作品)は上記の期間で行いましたが、文末のURLにて過去作品も含めて一部は視聴できますので是非ご覧ください。学会HPの映像表現研究会ページにもリンクがあります。

[オンライン公開研究会 | 参加者一覧]

司会進行: 奥野邦利(日本大学)

パネラー: 池田泰教(愛知県立芸術大学)、門脇健路(イメージフォーラム映像研究所)、田淵俊彦、西野毅史(桜美林大学)、北市記子(大阪経済大学)、大橋勝(大阪芸術大学)、黒岩俊哉(九州産業大学)、川口肇(尚美学園大学)、前田真二郎(情報科学芸術大学院大学[IAMAS])、宮崎淳(玉川大学)、李容旭(東京工芸大学)、伏木啓(名古屋学芸大学)、芦谷耕平(日本大学)、竹林紀雄、森憲一(文教大学)、伊奈新祐、村山匡一郎、瀬島久美子

敬称略

映像表現研究会としては、なかなか実現できずにいるのですが、制作系の会員の新作を中心とした上映及びそれに伴うシンポジウム開催を計画したいと考えています。スケジュール調整や会場確保など、皆さんの協力なくしては実現しませんので、ご協力のほどよろしくお願い致します。

早いもので伊奈新祐会員より研究会代表を引き継いで4年になります。先の研究会では伊奈会員より、生成AIについては、改めてシンポジウム計画してどうかとの提案も受けました。参加メンバー及び会員諸氏からの提案など御意見を私宛にお寄せ頂ければ幸いです。

<ISMIE2025参加作品>の詳細については、以下を参考して下さい。

<https://sites.google.com/view/ismie2025/>

継続公開可能な作品は、以下のYouTubeチャンネルにて過去作も含めて近日中に公開予定です。

<https://www.youtube.com/user/ismie2012>

文責: 奥野 邦利

(おくのくとし/映像表現研究会代表、日本大学)

映像テキスト分析研究会では、去る3月30日に2025年度(通算第25回)研究発表会を早稲田大学にて開催いたしました。発表者は梅本健司会員(東部/早稲田大学大学院文学研究科修士課程[当時])、題目は「カップルから離れて——『恐れずに』(1949年)の両義性について」でした。1時間強の発表ののち、20名を超える参加者によって充実した議論がたっぷり1時間ほど活発に繰り広げられました。以下、発表者である梅本会員ご自身に概要を報告させていただきます。

\*

1947年までワーナー・ブラザーズのスター女優であったアイダ・ルピノが、自身のプロダクションであるフィルメーカーズにおいて監督した『恐れずに』(Never Fear, 1949年)を取り上げ、従来の批評、研究において保守的と評価されてきた要因を整理するとともに、そうした評価に取まらない作品の細部を分析することで、本作の有する両義性とその意義について検討を試みた。

ルピノの監督作をめぐっては、中立的あるいは擁護的な立場をとる論者(Claire Johnston, Ronnie Scheibなど)も含め、多くの先行研究が、1940年代後半から50年代前半のハリウッド映画としては珍しい「議論を呼ぶ題材」を扱いながら、その題材に対する物語的解決が慣習的かつ保守的な水準にとどまると指摘してきた。たしかに『恐れずに』も、ボリオに罹患し身体麻痺を負った女性ダンサーがリハビリ施設で治療に励む過程を追う、同時代的には稀有な題材を持つ。しかしその一方で、身体麻痺がある程度回復し主人公が社会に半ば復帰する結末が、ダンスのパートナーでもある恋人との関係の修復と重ねられることで、最終的に異性愛規範や家長長制の枠組みを再生産しているのではないかと批判も繰り返されてきた。

本発表では、そうした疑義を踏まえつつ、具体的な演出の水準に即した分析を通じて、『恐れずに』がカップルの物語へと単純に還元されない側面を随所に備えていることを示した。とりわけ入院先のリハビリ施設における場面では、主人公を施設内の環境に慣らす役割を担う男性患者の存在が際立っており、当初カップルを中心に構成されていた画面は、それ以外の人間関係を捉えるために外へと開かれ、カップルの関係はそこで相対化されていく。こうした力学は主人公の退院後にも残存し、ラストシーンでは主人公と恋人の再会が街ゆく人々によって視覚的に遮断され、カメラもまた両者から引いていくことでその瞬間の強調を回避している。物語の面では主人公の問題に対してカップルの再会として慣習的な解決が与えられながら、演出はその解決からわずかに距離を取るのである。

今回は、こうした本作の両義性が、同時代のハリウッド映画ならびにスタジオ・システムの周縁で製作された独立プロダクションの作品群の中でいかに位置づけられ、いかなる歴史的意義を持つのかという当初目標としていた議論にまでは十分に踏み込めなかった。ただ、発表後の質疑応答では有益な指摘を多くいただいた。主人公と恋人がダンサーのコンビでもあるという関係の特異性や、映画内で繰り返される人物間の物品の受け渡しが各関係においていかなる意味を担うかなど、より豊かな作品分析へとつながる示唆を得た。また、『恐れずに』が何を伝えようとしているのか——一見サンプルでありながら作品の複雑さへと分け入るための根本的な問いから出発することの重要性も、あらためて認識させられた。これらを踏まえ、より密度ある議論に繰り上げていきたい。

(ふじい じんし/映像テキスト分析研究会代表、早稲田大学)

# 映画文献資料研究会

西村 安弘

## 第58回映画文献資料研究会報告

ガインクリティックの視点から、映画史の中で活躍した女性映画人に焦点を当てた企画上映や研究が、近年益々盛んである。国立映画アーカイブにおいても、2022年度「日本の女性映画人(1)——無声映画期から1960年代まで」、2023年度「日本の女性映画人(2)——1970-1980年代」、2024年度「日本の女性映画人(3)——1990年代」が開催された。

とりわけ、『グレープフルーツのような女 性乱の日々』(1981)の沖山秀子、『熟女スワップ若妻レズ 乱行恥態』(1994)の珠瑠美、『ダブルEカップ完熟』(1988)の浜野佐知、『発情娘 糸ひき生下着』(1998)の吉行由美、『境界線の向こう側』(1998)の小谷内郁代と、ピンク映画やゲイ映画と呼ばれる成人映画の分野で、女性監督の活動が際立つが、これらの女性映画人は、屢々女優の経験を踏まえて、監督に転身した経歴の持ち主である。

映画文献資料研究会では、これまで「インディペンデント映画研究」シリーズとして、山本晋也と佐藤寿保という二人の男性監督を取り上げた。第58回は、女優で監督の佐倉萌さんをお招きし、これまでの歩みについてお話を伺った。瀬々敬久の『黒い下着の女 雷魚』(1997)でデビューした佐倉さんは、黒沢清の『蜘蛛の巣』(1998)や城定秀夫の『ペリーバース』(2022)など、90本を超える作品に出演する傍ら、『人妻不倫痴態 義母・未亡人・不倫妻』(2001)で監督に進出された。近年はインティマシー・シーン監督としても活動されている。

日時：2026年3月14日(土) 14時～16時30分

第1部：映画『貪る年増たち サセ頃・シ盛り・ゴザ掻き(三十分・四十・五十路妻 熟れて喰べころ)』(2002)※参考上映  
第2部：佐倉萌トーク

進行：西村安弘(東京工芸大学教授)

サンミュージックブレーンに所属していた時、瀬々敬久監督の『KOKKURI』(1997)の最終オーディションに参加した。この時は悔しい結果に終わったが、次作の『雷魚 RAIGYO』(1997)でヒロインに抜擢された。ユーロスペースなどで、ピンク四天王(佐藤寿保、サウトシキ、瀬々敬久、佐野和宏)の作品を観ていたため、性的な表現や暴力的な表現のあることは理解していたが、笑うシーンが難しく、なかなか上手く出来なかった。一般映画として公開された『雷魚』は、成人映画館でも上映された。その後は、オリジナル・ビデオを含めて、多数の作品に出演したが、数えたことはない。当時のビデオ撮りの作品では、カメラ一台でカット割りをするので、基本的には、フィルム撮りと同じだった。

女優を監督に起用するオムニバス映画『人妻淫乱痴態 義母・未亡人・不倫妻』(2001)で、しのぎささとみ及び小川真実と共に監督デビューした。監督第3作の『貪る年増たち サセ頃・シ盛り・ゴザ掻き』(2002)は、エクセスの熟女路線の企画に従い、当初のシナリオでは、20代・30代・40代の設定だったものを、各々年齢を10才づつ引き上げ、怜子(松川怜未)、麻美(佐々木基子)、リカ(小川真実)の3人に振り分けた。撮影に当たっては、細かいカット割りを準備したが、3日間で撮影終了できるように、助監督の竹洞哲也が細かくア

シストしてくれた。監督助手としてクレジットされている今村昌平は、巨匠とは同姓同名の別人である。松川怜未の起用は、会社の指名だったが、クライマックスのハプニング・バーの撮影時には、知人の女優さんに動員をお願いしたため、興行的には高評価を頂いた。

アメリカではインティマシー・コーディネートの資格認定が制度化されているが、日本には該当制度がないので、インティマシー・シーン監修の名目で、現場に参加している。俳優と俳優、俳優と監督の間に入るので、演技や演出に影響を与える難しさを伴う。前張り使用の有無の確認から、スポーツ・テープを使った前張りの作り方まで教えたりする。(昔は、先輩女優から伝授されたものだった。)

サブ・タイトルの「サセ頃・シ盛り・ゴザ掻き」は、劇中でヒロインに性的手解きをする杉本(森羅万象)の台詞に由来する。元の小唄では「六十夢中で、七十泣くほど、八十張り切る、九十さすがに苦しい、百でお陀仏」と続き、女の欲望が灰になるまで果てしないことを示唆するものである。「私○○なんです。」といったヒロインのヴォイス・オーバー・ナレーションが定番だったロマンポルノの宇野鴻一郎ものは、男性の欲望を対象化したものだが、本作のヒロインの独白は、夫とのセックスに欲求不満を抱えて、遥かに辛辣である。「夫とのセックスを想像しながら、オナニーしていた時期もあったはず。思い出せない。今は昼間のオナニーの余韻に助けられながら、夫とのセックスに連れこんでる。逆よね、きっと。」

遠近法がブルジョワ・イデオロギーの反映だと主張したジャン＝ルイ・コモリに対し、カメラは先ず光学的な性質に依拠すると反論したデイヴィッド・ボードウェルに倣えば、ポルノグラフィックな映画が異性愛男性の欲望にいつも忠実である訳ではない。無人称なカメラに対して、本作のヴォイス・オーバー・ナレーションが、女性の欲求不満を代弁しようとしていることは、見逃せないであろう。

(にしむら やすひろ／映画文献資料研究会、東京工芸大学)

# アニメーション研究会

横田 正夫

アニメーション研究会は2026年3月15日(日)に、日本大学芸術学部A棟地下2階AB202教室で、15:10-17:30の時間で開催された。当日のプログラム概要は以下の通りであった。

## プログラム

15:10-16:10

表題：「CGレイアウト時代の作画と、生成AIのアニメーション表現における応用の可能性」

発表者：芦谷 耕平(日本大学芸術学部)

要旨：近年の日本のアニメーション制作においては、3DCGによるレイアウト設計を前提とし、それを基に手描き作画を行う制作手法が広く定着しつつある。作画監督として『ロード・オブ・ザ・リング/ローハンの戦い』(2024)、『ONE PIECE FILM RED』(2022)などの現場に携わる中で、こうした「CGレイアウトから描く作画」は、空間把握やカメラワークの精度を高める一方、アニメーターの身体感覚や描線の自由度との折り合いも含め、新たな関係性を生み出していると感じている。本発表では、実制作の事例をもとに、CGレイアウトが作画工程や表現選択に与える影響を整理する。あわせて、近年急速に発展する生成AI技術を、作画の代替ではなく「補助用途」「検討用の視覚化装置(プリビズ)」として捉え、今後のアニメーション作画にどのような可能性をもたらすのかを考察する。

16:10-16:20 質疑応答



16:20-17:20

表題：「アニメーションの作画はどこへ帰すべきなのか」

発表者：片瀨須直(日本大学芸術学部・コントロール)

要旨：日本の商業的なアニメーションの起点を、仮に戦後の長編第一弾である「白蛇伝」とするならば、現代までに68年が経過している。その間、作画の行われ方が一様であったわけではないが、「作画監督」「原画」「動画」というそれぞれの職種とその職分が創り出され、少なくとも20世紀中は一定の方向を見て安定していた。

しかし、今世紀に入ってアニメーションが、本数として大量に消費されるようになると、例えば、一作品に作画監督が数人から数十人が立てられ、原画の作業が「第一原画」「第二原画」などに分かれるような複雑化が発生している。これらは本来は、作らなければならない映像の量に対してアニメーターの人材が不足する状況の中で緊急避避的行われた方策だったはずで、決して理想的なものではない。しかし、異常な緊急避避が四半世紀にも渡って持続してきてしまうと、戻るべきところを知らない世代が現場で大半になってしまっている。

こうした点についての問題提起を必要としつつ、同時に理想的な方法があるとするならばそれはどういったものなのかを考える必要がある。現場で演出を行い、アニメーターの新人育成を行いつつある立場から知見を得た「どのようであるべきなのか」について述べたい。

17:20-17:30 質疑応答



プログラム概要は以上のようなものであった。参加者は53名であった。

芦谷氏の報告は、アニメーションの現場で体験したレイアウトシステムの変遷から始まって、その問題点の指摘に至っている。そもそもの現状を端的に言い表すとすれば細分化が進んでいるということのようである。例えば一本の作品に作画監督が多く存在し、原画も第1原画、第2原画がいるというような状況になっている。CGレイアウトの使用においては、多くの人数を配置するシーン、バスケットのような動きの激しいスポーツのシーン、歌を歌いダンスをするようなシーンでは多大な効果を発揮する。先に実写で演技を撮影し、それを2Dに置き換えてゆくような作業工程もあり、このような場合には実写の情報量の多さを割り引いてアニメーションする必要がある。いずれにしてもアニメーターはCGによる動きのレイアウトや実写の演技の隙間を埋めていくような作業を行うこともある。しかし、CGで作られたレイアウトでは、パスがあまりに機械的に作られ、人間の知覚の持っている独特の歪みに欠け、全体的にみると温かみに欠けるようになっている。芦谷氏はレイアウトにおいてもアニメーターが線に魂を入れていることを忘れてはならないと強調した。

片瀨氏の報告は、芦谷氏の発表の前史から始めている。東映動画の頃には複数の原画の上の立場で一人の作画監督が立てられ、監督と同等の立場で役割を果たしていた。しかし現在は作画監督が複数存在し、単独のカットにおいても第1原画に作画監督がかかわり、そのカットについてさらに別の第2原画が担当し、また別の作画監督が第2原画にかかわる。こうした現実には、カットの仕上がりに時間がかかることもあって、その間同一個人が待ちきれないと言ふことによる。しかしそれでは当カットについての責任の所在が曖昧になってしまう。むしろ一つのカットを、一人が最後まで担当すると、描く内容に対して演技を考えるようになり、アニメーションの動きの質が向上する。レイアウトに関して、実写では演技に沿って撮影が行われるように、アニメーションでも演技に従ってレイアウトが決まるのが自然であろう。例えば、母親が子どもを抱き上げるというカットにしても、子どもを膝に抱いて持ち上げる際には体の重さを実感するような演技を考え出す。こうした演技に従ってレイアウトが決まって来る。このようにカットを、責任をもって、最後まで仕上げゆくシステムがアニメーターの育成において今後重要になるのではないかと片瀨氏は報告した。

芦谷氏と片瀨氏に共通の問題点は、現在の分業システムの弊害とその打開策の模索である。芦谷氏はアニメーターとして手書きに戻る、片瀨氏は監督として責任をもって手書きを最後まで行う、ということを確認していた。いずれにしてもその先には人間の動きの本質理解をアニメーションに生かそうとする道がある様に思える。



(よこた まさお/アニメーション研究会代表、日本大学)

# 映像心理学研究会

横田 正夫

映像心理学研究会は2026年3月15日(日)、日本大学芸術学部A棟地下2階AB202教室で開催された。当日の研究発表のプログラム概要は以下の通りである。

## ■プログラム

13:00-13:45

表題：「大学生のフィクション作品に関する記憶とその心理学的機能」

発表者：新美亮輔（新潟大学人文学部）

要旨：私たちは、フィクション作品に影響を受けたということを年を経ながら思い出すことがある。昔よく読んだ本や好きなアニメについて、なつかしく思い出したり人と話したりすることはよくあるだろう。しかし、このような記憶の心理学的性質についてはあまり研究がない。近年、フィクション作品の記憶の一部が、現実のできごとの記憶と類似した自伝的記憶（AM, autobiographical memory）としての機能を有しているのではないかと指摘されている。AMは、その人にとって重要な意味づけがされてたびたび想起され、アイデンティティの形成や意思決定の助けとなる機能を持つとされる。そこで本研究では大学生を対象に、よく思い出したり話したりするフィクション作品の中のできごとの記憶を想起してもらった。その質やAMとしての機能を現実のできごとの記憶と比較した結果や、メディア種別の影響について報告する。

13:45-14:00 質疑応答



14:00-14:45

表題：「アニメを心の教科書に『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』が教える心

の成長—」

発表者：西郷達雄（北海道医療大学心理科学部）

要旨：本発表では、アニメ『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』を題材に、対人援助職に求められる「心の成長」について検討する。かつて感情を持たない「戦争の道具」であった主人公は、手紙の代筆という仕事を通じ、依頼人と向き合い、その想いを言葉にする中で、技術と心が「共に成長」していく過程を経験する。当初は論理的な理解に留まっていた主人公だが、他者の痛みに触れることで、やがて愛を届ける一人の人間へと成長を遂げた。この物語は、専門的な技術と豊かな人間性が不可分であることを示している。本発表では、本作がいかんして「心の教科書」となり、次代の医療・心理職の人間性を育む一助となるかについて報告する。また、その他の医療系アニメーション作品にも触れ、これらが教科書だけでは学べない倫理的な問いや、患者への共感を疑似体験させる教材となり得るかについて論じる。

14:45-15:00 質疑応答



以上のようなプログラム概要で、参加者は53名であった。

新美氏の発表は、映像の自伝的記憶（AM）についての発表であった。大学生を対象にした調査を行い、現実のAMとフィクション作品のAMを比較するものであった。フィクション作品の中には小説、マンガ、実写、アニメ、ゲームが含まれていた。その結果想起されるフィクション作品ではアニメが最も多く、対象年齢に近い20歳ごろに体験されたフィクションが最も多く思い出されていた。現実AMに比べてフィクションAMでの印象がより強かったのが唯一聴覚的な記憶の鮮明さで、中でもアニメのそれが高いという結果であった。影響を与えた人物についてみると、実在の人物がキャラクターに比べて多く報告された。それでも約半数の大学生は影響を受けたキャラクターがいると報告した。影響を与えたキャラクターはマンガが最も高く、アニメがそれに次いでいた。現実AMに比べフィクションAMでは聴覚的な記憶のような例外はあるものの全般的には機能が弱くなっていた。しかし個人の報告を調べてみると、気持ちを楽にするなどの癒しの報告もあった。

西郷氏の報告は、臨床心理学の観点からの報告であった。対象とした作品は「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」であった。主人公のエヴァーガーデンの手紙の代筆という仕事が、カウンセリングのプロセスに似ていると報告した。手紙を書く際にどのような意味なのか、なぜどのように考えたのか、先とは違っている、といったようにエヴァーガーデンが依頼者に問いかけていく事が依頼者への共感的理解につながっていると述べた。さらに今回の報告では、エヴァーガーデンのカウンセラー的な役割の背後に、人間としての成熟があることを示していた。そのために使用した分析方法がSCATであった。SCATでは言語素材を抽出し、言い換えを行い、説明概念を付与し、構成概念を得る。SCATを使用した結果エヴァーガーデンは自己理解の深まり、他者の夢を実演する身体的なかかわり、存在論的な深まりといったように自身のアイデンティティを進化させていると報告した。以上の事からエヴァーガーデンの示した人間として成熟プロセスは、臨床現場でのロールモデルとして臨床教育に利用可能と述べていた。

今回の研究会では、映像の基礎的な報告と応用的な報告から、映像が癒しに関連することが示された。

（よこた まさお／アニメーション研究会代表、日本大学）

# クロスメディア研究会

李 容旭

第18回クロスメディア研究会の研究発表を下記のように開催しました。

開催日時：2026年2月22日(日)14:00-16:30

開催場所：オンライン開催

【講演者】金蓮淑(キム・ヨンスク)(崇実大学校(韓国) 兼任教授)

「コンテンツ制作教育における生成AIの活用

～「仮想ブランド設立プロジェクト」の授業事例を中心に～」

## 1. プロジェクト概要

本プロジェクトは、学生が仮想ブランドの創業者となり、生成AIを活用してブランドの世界観構築から視覚化までの全プロセス(A to Z)を経験することを目的とした実践型カリキュラムである。単なる技術習得にとどまらず、人文学的な企画力とAI技術を融合させることで、高度な映像コンテンツを制作する能力の強化に重点を置いた。

## 2. AIを活用した映像制作プロセス

学生たちは、以下の体系的な3段階の工程を経て、生成AIベースの高画質映像を具現化した。

### 第1段階：戦略立案およびストーリーボード作成 (Planning)

内容：ブランドペルソナ、STP戦略、ブランドの世界観を構築。広告戦略に基づいた映像の流れ(カット、構図、演出)を設計し、ストーリーボードを具体化する。

活用ツール：Gemini, ChatGPT

### 第2段階：ビジュアルアセット生成 (Visualizing)

内容：ブランドの核心価値と色彩心理を反映させた精緻なプロンプトエンジニアリングを実施。企画したシーンに合致する高解像度のイメージリファレンスを導き出す。

活用ツール：Gemini, ChatGPT, Midjourney, Whisk 等

### 第3段階：AI映像生成およびポストプロダクション (Directing & Editing)

(1) 映像生成：Veo, Sora, Kling, Runway, Luma等の最新ビデオ生成モデルを使用し、イメージを動的な映像へと変換する。

制作のヒント：より精緻な結果を得るためには、テキストから直接映像を作るよりも、キャラクターと背景を個別に生成して合成した後、それを映像化(Image-to-Video)する手法を推奨。要素ごとの制御が可能になり、意図に近い映像が得られる。

(2) 編集・合成：Premiere Pro等を用いた精緻なカット編集(サウンド・効果挿入)および、TypeCast (AIボイス)によるナレーション挿入を行い、最終的な広告映像を完成させる。

## 3. 主要事例：プレミアム・カクテルブランド「ATLAS」

### ア. ブランド企画および広告イメージ



## イ. 広告映像



- (1) FOOH映像: ニューヨークの自由の女神像に巨大なATLAS缶が登場する超現実的な演出をAIで具現化。圧倒的な存在感(Hyper-real Shock)とバイラル効果を創出した。  
\*FOOH (Fake Out of Home): 実写の屋外風景に精密なCGI(3DCGなど)を合成し、あたかも現実で起きているかのように見せるデジタル広告手法。
- (2) ストーリーテリング広告: カクテル美食家アレックスが伝説のレシピを探し求める旅を、3Dアニメーションで具現化。ブランドの世界観を投影し、叙事的な深みを伝達した。
- (3) TV/プロモーション広告(学生評価1位): 映画『ナイト ミュージアム』のコンセプトを借用。古典芸術作品の中の主人公たちが製品を共に楽しむ躍動的な演出を通じ、ブランド価値である「分かち合う楽しさ」をウィットたっぷりに表現した。

\*完成された映像は以下から見ることができます。

[https://youtube.com/playlist?list=PLTPoFA8zKBa7jMz2V1keKOWFCzMgub7ZQ&si=H4Wg\\_xGyja9cd65p](https://youtube.com/playlist?list=PLTPoFA8zKBa7jMz2V1keKOWFCzMgub7ZQ&si=H4Wg_xGyja9cd65p)

## 4. 教育成果および学生のフィードバック

- (1) 生産性の革新: AIを活用することで、伝統的な制作方式に比べ時間と費用を画期的に短縮しながら、専門家レベルの成果物を導き出した。
- (2) 実務能力の高度化: 学生たちは単なるツールの活用を超え、技術をコントロールし、ブランドの本質を貫く企画能力を確保した。
- (3) 対外的成果: YouTubeや校内放送を通じて高い反響を得ており、ポジティブなフィードバックを確認した。

## 5. 結論および今後の展望

本教育は、急変する技術環境においても揺らぐことのない「企画の本質」と「思考の深さ」を追求することに集中した。単に画面をデザインするレベルを超え、ユーザー体験全体を設計する洞察力を備えた「未来のAIアーキテクト(Architect)」の養成を目指している。次期プロジェクトでは、人文学的洞察と映像理論を結合した「独立映画制作」へと領域を拡張する予定である。

(り よんうく/クロスメディア研究会代表、東京工芸大学)

# アナログメディア研究会

太田 曜

## ■実験映画を観る会VOL.17

帯谷有理『台湾少年』8ミリフィルム上映会



### 【経緯】

帯谷有理は、8ミリフィルムで長編の実験映画をつくる稀有な作家である。以前に『毛髪歌劇』を上映しないかと依頼したが、断られたことがあった。それでは『台湾少年』ではどうかと依頼してみたところ、快く承諾してくれたのである。『台湾少年』を8ミリフィルムで上映する機会は久しくなかったことであり、そのせいか多くの観客が集まり盛況であった。

### 【案内文】

『台湾少年』は、帯谷有理が1994年に発表した8ミリフィルムの長編映画である。作者が演じる主人公のユーリと彼とつきあう女性たちをめぐる悲哀の物語を、8ミリフィルムという表現媒体と重ね合わせていた。サウンドトラックに関する実験をおこなっており、作品の約半分が生フィルムをそのままつないだ黒味の画面である。黒味でも音声は続いていて、観客は音の存在を強く意識せざるをえない。1992年の『毛髪歌劇』がたいへん評判になった帯谷が、満を持して発表した自信作が『台湾少年』だった。前作ほどの派手さはないが、完成度は『台湾少年』のほうが高い。

### 【プロフィール】

音楽大学在学時より現代音楽、朗読詩、サウンドアートなどの作品を発表。大学中退後は弾き語りによるバスキングなどで食いつなぎながら、1993年に8mmフィルムで制作した最初の映画『毛髪歌劇』でイメージフォーラム・フェスティバル1993のフィルム・オリジナリティ賞を受賞し、劇場および国際映画祭デビュー。以降《フランス映画》(1994)、《厭世フフ》(1998)、《夢見るパイプオルガン》(1999)などの映画作品が国内外の多くの映画祭や特集上映などで上映される傍ら、多くの映像作家が参加する《路地の子》シリーズ(1995～)を企画したり、東京の調布映画祭にショートフィルム・コンペティション(1997～)部門を創設するなど、ニッチな地下映画・自主映画活動をサポートする。愛知芸術文化センターの委嘱による《サイケデリック・オルガン・パンダ》(2003)では「匿名の一人称の視点／聴取点」で全編を描写

した擬似ドラマを試み、2007年発表の《酸っぱい畑》以降の映画では物語や脚本、人物描写を放棄し、全編一人称の視点／聴取点の描写に加えて全編シークエンスショット、全編移動撮影といった独自の映画語法を用いて、視界のパノラマの移動に伴って変化する音の形象をデザインするような映画を一貫して撮っている。2016年からは弾き語り活動を再開。2017年には「ヤコブ律」という調律法を用いた楽曲を発表し、2021年に発表した映像書簡《通信》(台湾の映像作家・李明宇氏とのコラボ)の中でも、パフォーマーたちに楽曲をヤコブ律で演奏させている。

### 【日時】

日時：2026年1月10日(土曜日) 14時から上映

場所：小金井市中町天神前集会所

(〒184-0012東京都小金井市中町1丁目7-7)

参加資料代：1000円

### 【上映作品】

帯谷有理『台湾少年』8ミリフィルム、80分、ステレオ、カラー、1994年

### 【スケジュール】

13：45 開場

14：00-15:50 上映、解説

16：00-16:30 休憩

16:30 対談&質疑応答「『台湾少年』をめぐる」(帯谷有理×西村智弘)

17：00 終了

### 【主催】

日本映像学会 アナログメディア研究会、8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

(西村智弘)

## 実験映画を観る会 VOL.18

黒川芳朱 特集上映&映像パフォーマンス



【経緯】

黒川芳朱のフィルム作品と可能ならばフィルムパフォーマンスを実験映画を観る会で行いたいというのはこの上映会が始まった早い段階から考えられていた。作家と交渉をしていたが国家資格取得の為の受験勉強などがありスケジュールの調整がつかなかった。2026年の年度末にスケジュールも調整でき開催となった。黒川作品はごく初期の“演劇”その後の8ミリ、16ミリのフィルムによる映画作品、ビデオ、デジタル映画作品、更に映像を使ったパフォーマンスと極めて幅広い。どの作品にも共通していると思われるのはそれぞれのメディに独自の表現の追求と、各メディアあるいはメディ全般についての考察、批評的表現、あるいはメディアに対する問題提起ではないかと思われる。

【告知文】

実験映画を観る会 VOL-18

2026年3月29日 日曜日 14時から上映

黒川芳朱 特集上映&映像パフォーマンス

8ミリフィルム、16ミリフィルム、ビデオ、デジタル、身体表現、あらゆるメディアを縦横無尽に駆使。八面六臂、メディアを横断する黒川芳朱のフィルム作品特集上映。

小金井市中町天神前集会所

(〒184-0012東京都小金井市中町1丁目7-7)

<https://www.mapion.co.jp/phonebook/M13007/13210/2133113710/>

武蔵小金井駅南口から徒歩約14分

参加資料代：1000円(当日現金でお支払い下さい)

参加は予約制です。予約フォームにご記入ください。

2026年3月29日 日曜日 14時から上映

13時45分開場

14時～16時10分 上映&パフォーマンス

16時10分～16時40分 休憩

16時40分～17時40分 トーク 聞き手 太田曜

上映作品 / パフォーマンス 合計110分

- 「GHETTO BOY」 1978年/8ミリ/25分/カラー/サウンド  
共同監督・出演：黒川芳信・諸橋精光
- 「セルロイドの砂漠」 1981年/8ミリ/45分/カラー/サウンド  
協力：身体気象研究所
- 「机の上の痛んだ紙」 2002年/16ミリ/6分/カラー/サイレント
- 「イコノクラスムNo.1」1999年/12分/16ミリ/サウンド  
声の出演：藤岡輝彦、岡野えり 音楽：大南匠
- 「イコノクラスムNo.9」2000年/12分/16ミリ/サウンド  
音楽：佐々木柁
- 「メディアの生態学の時代」2026年/10分/映像パフォーマンス



主催：日本映像学会 アナログメディア研究会

<https://www.facebook.com/analogmedia>

<https://twitter.com/analogmedia>

8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

<http://shink-tank.cocolog-nifty.com/perforation/>

<https://twitter.com/8mmfkkp>

上映作品&パフォーマンス 解説

「GHETTO BOY」 1978年/8ミリ/25分/カラー/サウンド

共同監督・出演：黒川芳信・諸橋精光

コメント：諸橋精光と結成したSILVER EYEという美術グループの都市をテーマにした二人展「GHETTO BOY」(早稲田画廊)で発表した8ミリ作品。映像論、存在論、都市論を重ねようとした試み。タイトルからもわかるように、疎外論的認識が根底にあるが、それをほみ出し後の作品につながる意識も多々あるので、今回の上映の冒頭に見ていただくことにした。

「セルロイドの砂漠」 1981年/8ミリ/45分/カラー/サウンド

協力：身体気象研究所

コメント：☆人間を一個のカメラ=暗箱とみる発想は、自我という概念の発生と期を一(ママ)にしている。視覚優位の人間の文化は、その後この自我という概念をより強固なものとしてきた。自我=暗箱という等式により、人間の内面はプライベートルームと化した。☆眼球をレンズと見立て、人間をカメラと考える発想はそのままとして、ではどこからが我々の内面なのか。水晶体と網膜の間には明らかに外光が流れ込んできている。では網膜より脳までの部分か? ところが体内には太古からの様々な情報系がおりたたまれている。我々の内側にプライベートルームなどあるのか。☆触視覚映画の可能性。(1981年のコメント)

「机の上の痛んだ紙」 2002年/16ミリ/6分/カラー/サイレント

コメント：1999年から始めた「静物映画集」シリーズのひとつ。「静物映画集」の制作にあたって、次のようなコメントを書いた。

「一見そっけない題名(静物映画集を指す)だが、映画的イリュージョンの破棄という挑戦的な意図を込めている。動きを再現するために作られたメディアで動かない物体を撮る。いくつかの前提条件を決める。①撮影へ

駒撮り。②被写体の動きのイリュージョンを作らない。③カメラの動きのイリュージョンを作らない。④時間経過のイリュージョンを作らない。④光の変化のイリュージョンを作らない。」(2001年のコメント)

「イコノクラスムNo.1」1999年／12分／16ミリ／サウンド

声の出演：藤岡輝彦、岡野えり 音楽：大南匠

「イコノクラスムNo.9」2000年／12分／16ミリ／サウンド

音楽：佐々木柁

コメント：イコノクラスムとは、7世紀から8世紀のビザンチン帝国で起きた

「偶像破壊令」に代表される、偶像破壊運動のこと。

「偶像崇拜の禁止。人間の歴史は常にこの禁止事項を破り続けてきた歴史だ。ひとはなぜ、偶像を求めるとか、見えないものを形にしたがるのか。大いなるものの姿を映した板切れを崇拜するのか。だが、イコンはもともと、日食を眺めるための、すすをつけたガラス片のようなものだったのではないだろうか。大いなるものの測定器が、大いなるものの代替物に転じてきた歴史。この過程を逆行すること。巨大な失語症を経て、形なき者へ。」(2000年のコメント)

「メディアの生態学の時代」2026年／10分／映像パフォーマンス

コメント：1982年2月にオープンし、私自身その設立・企画・運営に参加したオルタナティブスペースPLAN-Bで開始した連続映像パフォーマンスのタイトル。パフォーマンス開始時のコメントを引く。「もう一度僕は、自分自身を歴史の生体実験にかけよう。ビデオ・フィルムというすでに情報のパックされたメディアを使って、いかに即興的に場所を編集していけるか。僕は神経線維にピンコードの内蔵された素敵なDJになりたい。」(1982年10月PLAN-Bカレンダーより)

2026年の今日、何をパフォーマンスできるか。

黒川芳朱

作家プロフィール

1954年生まれ。創形美術学校卒業。イメージフォーラム付属映像研究所卒業。日本福祉大学卒業。映像作家。社会福祉士。

フィルム、ビデオによるシングルチャンネルの作品のほか、パフォーマンス、インスタレーションにより、視覚の言語性を解体し発生的場の成立を目指す。

1982年より、オルタナティブスペースPLAN-Bの設立・企画・運営に参加。1988年より、「白州・夏フェスティバル」の企画運営に参加、光学劇場のメンバーとして野外での映像インスタレーションを行う。1994年より二人の音楽家、佐々木柁、大南匠と映像と音楽のグループ「ORIGINAL SOUND TRAIL」を結成、パフォーマンスを展開。

フィルムグラフィ：『眼のガリバー旅行記』(81)『日刻』(89年)『イメージの博物誌』(1992)『砂の本』(96年)『静物映画集』(2001)『離散の歌』(2011)『たましひのからだ』(2012)「都市と知覚のフィールドノート2」(2016)



#### 【報告】

黒川芳朱作品は映画祭などで他の作品に挟まれて一本だけ見るとなかなか分りにくいと言われる場合も多い。それは、黒川作品がメディアそのものを問題にしている事と関係しているのかもしれない。実験映画を観る会では黒川作品、フィルムで制作された映画を初期からビデオに移行する直前の2000年制作のものまで上映した。さらに最新作となる本人が出演するフィルム映像を使ったパフォーマンスも行った。黒川作品をある程度まとめて見る機会は過去そうは無かったと思う。また、トークではメディアについて考えることを語ってもらい、黒川芳朱という作家についての理解が深まったのでは無いかと思う。いつも行っている上映だけの回と異なりパフォーマンスはかなり本格的なモノで準備はそれなりに大変だった。しかし、黒川芳朱という作家の作品を理解してもらう上では必須だったのでは無いかと思う。トークの際の質疑応答では図らずも実験映画の保存についての質問があった。研究会では『実験映画の保存について』も国立映画アーカイブ新館長のとちぎあきら氏を講師に招いて行っている。フィルムでの実験映画の保存についてはface book の研究会ページにこの回の記録もあるのでぜひ参照して頂きたい。

(太田曜)

(おおた よう／アナログメディア研究会代表)

## ドキュメンタリードラマ研究会

杉田このみ・中垣 恒太郎

第12回ドキュメンタリードラマ研究会を下記の通り開催した。

テーマ：1970年代テレビドラマの実験精神をめぐって  
 日時：2026年3月8日(日) 10時30分～18時30分  
 会場：専修大学 神田校舎7号館(大学院棟)731教室  
 講師：笹山敬輔氏(演劇・大衆文化研究者)、  
 岡室美奈子会員(早稲田大学)  
 コメンテーター：藤田真文氏(法政大学)  
 司会：丸山友美会員(静岡大学)

## プログラム

## 1. 上映

10時30分 東芝日曜劇場『天国の父ちゃんこんにちは その4』(TBS、1967、52分)  
 11時30分 『お荷物小荷物』「18・19、最終回」(朝日放送 [TBS系列]、1970-71、50分)

## 2. 講演

13時00分 講演1 笹山敬輔氏「ホームドラマの系譜——鴨下信一と久世光彦」  
 14時45分 講演2 岡室美奈子会員「ザ・セブンティーズ：政治の季節の終焉から黄金期までのテレビドラマ」

## 3. ディスカッション

コメンテーター：藤田真文氏 司会：丸山友美会員

主催：日本映像学会ドキュメンタリードラマ研究会、専修大学現代文化研究会

共催：高志プロジェクト(高志の国文学館研究助成)

\*本研究会は、専修大学学際融合科目「テレビ研究」の一環としても開催した。

## 第一部 上映

第一部では、放送ライブラリーの「番組利活用サービス」を利用して上映した(参加者は約20名)。上映後、本研究会名誉顧問の今野勉氏より佐々木守についてのコメントをいただいた。



第一部上映の様子 放送ライブラリー「番組利活用サービス」にて上映

## 第二部 講演

## 講演1 笹山敬輔氏「ホームドラマの系譜——鴨下信一と久世光彦」

本講演は、TBSのディレクター・鴨下信一と久世光彦を軸に、第一部で上映した『お荷物小荷物』の脚本家・佐々木守によるテレビ観「テレビはドキュメンタリーであって、ドラマもそのうちの一つにすぎない」などを参照しながら、

テレビというメディアの固有性、ドキュメンタリーとドラマの交錯の観点から論を展開した。

鴨下は音楽・バラエティ番組とドラマの「二足のわらじ」からディレクターのキャリアを出発し、「ドラマも音楽もニュースもドキュメンタリーも何もかも、次から次へとつながって一つの画面に映ってくる」というテレビの「雑居性」にその特質を見出す。その後、山田太一脚本『岸辺のアルバム』(1977)や『思い出づくり。』(1981)においてドキュメント的なタッチを持ち込むに至る。

一方の久世は当初こそ強い芸術志向を示していたが、やがて大衆路線へ転換し、日本家屋を舞台にしたスラップスティック喜劇を展開した。また久世は、テレビの「生放送性」と「消えていく」こと自体に本質的な価値を見出し、記録・保存にこだわらないテレビメディアの特質を追究した。1980年代以降、久世が向田邦子ドラマという「昭和10年代」の懐古的な世界へと向かっていく一方で、鴨下は『ふぞろいの林檎たち』(1983)や『高校教師』(1991)など時代の最前線を走り続けた。2人の足跡を比較しながら辿ることで、それぞれの対照性が浮かび上がる。

講演の後半では、鴨下が『調査情報』誌上に長年連載した「テレビ日記」の内容が丹念に紹介された(笹山氏による叢書「ケロリンBOOKS」にて、鴨下信一『テレビ日記 ホームドラマの系譜』として刊行予定)。主要な論点として、石井ふく子・橋田壽賀子による「家庭を描けば社会のすべてがわかる」というホームドラマの理念、1970年前後における「ホームドラマ帝国」の限界と「脱ドラマ」の出現、そして森光子・山岡久乃という「お母さん役者」像の形成などが提起された。鴨下によれば、2人は本来「叔母さん役者」としての資質を持っていたが、1970年代以降の社会変化が「一緒になって考えてくれる経験豊かな母親」像を求めた結果、その役割を担わされるようになったという。様々な言説に基づきながら、鴨下・久世という2人の演出家の双曲線を描くような軌跡を通して、ホームドラマの観点から日本のテレビドラマ史の展開を再考する、示唆に富む講演内容であった。



笹山氏 講演の様子

## 講演2 岡室美奈子会員「ザ・セブンティーズ：政治の季節の終焉から黄金期までのテレビドラマ」

本講演はまず、1972年のあさま山荘事件を「政治の季節」の終焉と位置づけ、その後の虚無・シラケ世代の蔓延を背景に、映画監督がテレビに参入してニヒリズムやビカレスクの作品群が登場した文脈を参照した。

主要な論点として、70年代ホームドラマにおける〈父〉の不在に注目された。従来、ホームドラマは戦後民主主義が体現する明るく理想的な家族像を描いたものと評価されてきたが、岡室氏はこの通説に根本的な疑問を投げかける。もしホームドラマが理想の家族像を打ち出したのであれば、なぜこの時代の主要なホームドラマの家族には必ず「不在」がつきものなのか。多くの人気ホームドラマでは父は不在であり、父が登場する場合は、血縁なき

子を育てる「父になる」パターンや権威を剥奪された「ダメ親父」として描かれたことを指摘し、「日本の父親は民主化されていなかった」という仮説を提起した。高度経済成長を突き進んだ父親たちは封建的家父長制を更新できないまま戦後を生き続けており、民主主義的な家庭像とは根本的に相容れなかった。つまり、父親が登場した瞬間に明るく民主的な家庭は崩壊する運命にあったがゆえに忌避されたという点に注目する。

70年代ホームドラマは戦後民主主義の「理想の体現」などでは決してなく、〈父〉の不在や空洞化によって戦後民主主義の欺瞞と機能不全を炙り出す装置であったのだ。山田太一脚本『岸辺のアルバム』はその究極形を示すものであり、郊外の中流家庭が家族全員の秘密の暴露とともに多摩川の洪水に飲み込まれるという結末は、高度経済成長が覆い隠してきた戦後日本の〈父〉の実態を赤裸々に暴露するものであった。

ホームドラマの温かい家族像とは、残存する封建的父権性を隠蔽し、下町という「過去のコミュニティ」を舞台にすることで辛うじて成立させた虚構にすぎない。70年代ホームドラマは、「テレビの実験精神」の観点からは一見、零れ落ちてしまいかねないが、実はこの時代のホームドラマにこそ戦後の日本社会を読み解くための鍵が込められているという示唆で締めくくられた。



岡室会員 講演の様子

### 第三部 ディスカッション

丸山友美会員を司会に、藤田真文氏がコメンテーターを務めた。以下、ディスカッションの要旨（敬称略）。

#### 丸山

2018年第4回ドキュメンタリードラマ研究会にて『お荷物小荷物』について、演出を担当した西村大介氏へのインタビューを踏まえて研究発表をした。60年代から70年代にかけてUHF帯の開放が進み、ローカル局が増え、テレビの地理的拡大が進んだ。在阪の準キー局から「東京への反逆」の精神もあって、東京が無視することを大阪は無視できないから、番組の中で積極的に沖縄を描いていた。沖縄返還が迫っているときに、ホームドラマで幸せ家族を描くことだけが時代ではない、という気持ちがあった、とのお話があった。

テレビ産業が拡充する中で、ドラマもドキュメンタリーも拡充していた。1968年、佐世保にアメリカ原子力空母エンタープライズが寄港するかどうかの問題、69年の安田講堂占拠、72年にはあさま山荘事件と沖縄返還など、戦後民主主義社会をどう考えるかという大きな流れの中で時代が動いていた。

#### 藤田

『お荷物小荷物』は沖縄の女性が主人公でアイヌを扱う回もあり、最終回では「9条廃止してどうしよう」と描かれるなど、当時マルクス主義に軸を置いたマスコミュニケーション研究者に激賞された。しかし、作品論が弱く、作

品分析までには至らなかった。

『天国の父ちゃんこんにちは』は記憶がなかった。伏線回収もあり、出来上がっているドラマ。主演の森光子が住んでいるのは長屋で行商先は団地。舞台設定が時代を凝縮している。個人的には、1970年代の久世ドラマの方が鮮明に記憶に残っている。

ドラマのドキュメンタリー性について鴨下は、山田太一と組んだ78年『岸辺のアルバム』以降（『想い出づくり』『ふぞろいの林檎たち』……）、テレビドラマで自覚的・意識的に現代社会を写し取ろうとしたと思うが、東芝日曜劇場『天国の父ちゃん』のころから自覚・意識されていたのか？ はたして久世には、現代社会の表象（リアリティ）といった課題はどれくらい意識されていたのか？（むしろ虚構としての街・家族を作り上げようとしたようにも思う）

#### 笹山

鴨下の1970年代の代表作は意外とない。『岸辺のアルバム』が演出家として作家性が出ている最初の代表作と言える。それ以前からテレビ制作者たちは、より方法論への探求が強いという印象がある。現代社会を表象する方法論としてドキュメンタリー的に撮ることで、結果的に現代社会を映し取るようになっている、ということか。

久世については、70年代の前衛的な作品が印象にあるが、調べていくと保守的な側面も見えてきた。幼い頃の軍人であった父の影響、80年代に昭和10年代の向田邦子作品を描くなど、それをどう評価するかはまだ検討中。

#### 藤田

『天国の父ちゃんこんにちは』では、日比野都『天国の父ちゃんこんにちは』一パンツ屋のおばはん、生活奮闘記』（立風書房、1969年）の原作部分は第1回で終わって、その後は鴨下が原作者に取材してドラマにしたのは面白い。鴨下にはそういう意識があった。

#### 笹山

まさにそれがドキュメンタリードラマとして撮るという意識があったと言える。それは鴨下独自ではなく、その時代の特にTBSのテレビ制作者に強い意識があった。

#### 藤田

「テレビとは、果てしない時間の流れの総体である」と言う佐々木守と、「何か突発的なことが起こらないかと期待を込めて撮っていた」と言う久世は、スタジオドラマでその考えを実現したと言っているのか？ 佐々木と久世に比べて「最初期のドラマの意欲作はみなこの〈雑居性〉の産物だといってもいい」という鴨下の言葉は、彼の作風にどれくらい反映されていたのか？ 『天国の父ちゃんこんにちは』は隙のない完成された演出のドラマと感じる。実況・ハブニング性などはない。

#### 笹山

テレビ論を勉強していくと、バラエティ、テレビドラマ、ニュースなど、すべての議論が「生（なま）」「同時性」「時間芸術」に収束していくという印象がある。YouTubeなど多様な動画メディアが出てきた現代において、テレビの特異性である「同時性」があり続けられるのか、それがテレビの苦境に影響しており、何が強みになるか再度議論になっている。

鴨下の番組が残っていないので議論しにくいのが、鴨下は最初の15年くらい『日曜8時、笑っていただきます』などバラエティも担当していたので、『お荷物小荷物』に並ぶような「雑居性」のある作風で作っていた時期もあると考える。

#### 丸山

1926年12月25日にブラウン管に映写に成功したテレビの父・高柳健次郎に遡り、その言葉を調べても「同時性」という言葉はなく「同期」と言っ

いる。「同時性」という言葉はテレビ制作者が表現を生み出すときに作り出したのではないかと考える。50年代テレビドキュメンタリーは「どうやって映画的なものから逃れるか」を模索するが、結局映画に向かってしまう。その中で、TBSの今野・萩元・村木らが「現在性」「同時性」という言葉を表現として具体化していく。上の世代へのアンチテーゼとして生まれてきたと考えられると、テレビの特性が花開く60年代の後、何をやるのかを模索したのが70年代ということになる。縛られないテレビの可能性を模索していたと考えられると興味深い。

#### 藤田

久世は、向田ドラマを演出することで家父長制の衰退を表現したかったのか？それとも家父長制へのノスタルジーが久世の中にあったのか？

#### 岡室

久世の父は軍人であったが、久世自身は家父長制の衰退を描こうとは思っていないと思う。今から見て家父長制に回帰しているようで相対化しているし、空洞化もしている。

今回の講演でお題をいただき、70年代のホームドラマは理想の家族像を描くと思っていたらそうだったのか、という問いが浮かんだ。「現実とズレているからホームドラマは相手にされてなかった。下町コミュニティで和気藹々とするのはそれ自体がファンタジー」と思っていたが、なぜみんな見たのか。「現実から乖離している」ではホームドラマ論は止まってしまう。それをいかに止めないかという話をしたかった。ホームドラマが何を表象していなかったのか、していたのか、そういうことに目を向けることで70年代のドラマを捉え直す試みである。

#### 笹山

80年代、久世は向田邦子原作で、加藤治子が母、田中裕子が長女、小林薫が関わるという固定の役者で向田ドラマを演出し、昭和10年代を舞台としていた。そしていつも父不在。60年・70年代の父不在を継承している。久世ドラマの議論だけではなく、加藤治子論が必要ではないかと感じている。向田は、加藤を森光子的な母親というだけでなく、女性の「性」を如実に描く。加藤治子を軸に久世演出の向田について議論ができるのではないかと。

#### 岡室

向田はどこか保守的な価値観がある。しかし、なぜ面白いかというと、微妙な心の機微や言語化できない心のひだをぐいぐい書き込んでいくところ。加藤治子論はぜひ書いて欲しい。

#### 藤田

『岸辺のアルバム』による家父長制崩壊の宣言は、80年代の山田一鴨下ドラマにどのように結びついていくか？

#### 岡室

結びついているものがあると思われるが、70年代のホームドラマの隆盛がその後のドラマに受け継がれていないような気がする。山田太一『岸辺のアルバム』は記念碑的作品で、山田の手法としては、何かをぶち壊して次に進むところがある。それが確立したドラマであり、引き継がれている。

### フロアからの質疑

#### 大学院生①

『お荷物小荷物』最後のシーンが、1966年に新しく建てられた朝日ホール（朝日放送）が見えるショット。テレビ業界では地理的な拡大があり、建物が建つことで企業組織が再組織されることもある。NHKは60年代後半に建物が建つことで、分担されていた報道・教育・演出部が横断的に共同制作できるようになった。久世がTBSに残ったのは、組織的なことが考えられるかどうか。

#### 笹山

なぜ1960年代TBSのテレビ制作者たちが「テレビとは何か」という問題意識を強く持っていたのか、なぜTBSだったのか。正直答えがない状態だが、鴨下は1958年、今野と実相寺が1959年、久世が1960年入社で、それが偶然か必然か、テレビ研究する上で重要な視点。

#### 藤田

当時は、テレビ局に入社するのは「映画やラジオに行けなかったから」という人が多かった。また演出経験がないのに、ドラマやドキュメンタリーの現場に出されるなどがあった。

#### 丸山

村木と今野らは、テレビを見た状態で放送局に入社した。1953年入社でラジオからキャリアをスタートした萩元とは世代が違う。ラジオかテレビかという選択肢があった状態。

#### 学部生

70年代のテレビドラマを研究したい。『天下御免』（NHK、1971年）と『天下堂々』（NHK、1973年）の違いについて知りたい。また、『天下堂々』は映像が発掘されたが、『天下御免』は残っていない。映像が残されていない作品をいかに研究するか。

#### 笹山

国会図書館の全文検索がしやすくなった。今までの目次検索では辿り着けなかった資料にも辿り着けるようになった。週刊テレビガイドはまだ検索できないので、全部当たるしかない。

#### 岡室

『天下御免』の新規性は、テレビ技術への自己言及性だった（例：早送り表現など）。テレビの技術を見せることで「テレビは作り物だ」ということを逆手にとり面白いものとして見せていく。現代との接続がそこにある。『天下堂々』については『天下御免』の衝撃を超えるものではなかった。

演劇研究で問題になるのが「見たか、見ていないか」。しかし「見ていないからこそ語られる」こともある。見ていると自分の記憶に縛られ、記憶は改ざんされているかもしれない。見た人は生きているので証言を集めることができる。残っている脚本から想像力を駆使してドラマを再構成することと、見た人の証言を集めることの両方が重要。

#### 大学院生②

初期のテレビの芸術運動を研究しており、50年代でも「同時性」についての議論がある。ドラマにおいて「同時性」はどれくらい意味があったのか。また『天国の父ちゃんこんにちは』の「こんにちは」は大阪万博の歌か？ドラマの中でも「1970年」というセリフがあり、大阪万博との間に何か共有されていたものがあったのか。

#### 藤田

「1970年のこんにちは」という歌詞があつてとても流行した。前回の大阪万博よりも何十倍ものインパクトがあった。

#### 岡室

映画はパッケージのメディアであり、完結している。しかしテレビは、ニュース速報・地震情報・CMも入るといふ非完結性のメディア。ドラマも続く。そこに改めて自覚的になっていく。

演劇を見に行くと役者がセリフを忘れていたりすると得た気分になる。その「ほころび」が「同時性」、「今この場を共有している」感覚を強化する。虚実皮膜が揺らいだ瞬間が面白い。テレビはそれが揺らぎやすいメディア。生放送から録画の時代になり、揺らぎがなくなった時にそれをどう取り戻すか、その試行錯誤がされたのかと考える。

#### 藤田

連続ドラマが放送中に制作されることもある。視聴者の反響で打ち切り・

ストーリーの改変などがある。シリーズとして物語性を帯びているのがテレビドラマの重要な点。夏目漱石は「こころ」を連載中、打ち切るつもりだったけど事情があって引き伸ばさなくてはならなくなったと漱石の日記に書いてある。引き伸ばさなくてはならない時に何を書いたのか研究できる。同じようにテレビ研究もできる。

60年代にある程度ドラマの形はできてきたが、それを再生産するのはつまらない。技術的にはできるけど、あえてやらない。テレビの可能性を追求しようとしていたと考えられる。

#### 笹山

思想があり作品が生まれると考えられるけど、テレビの場合は先に技術的制約がある。その技術の変遷があって、生まれてくるものも変わるという視点もある。

#### 一般参加者

父の不在・弱体化もあるが、母親（女性）を頑張らせたい意図があるのだろうか。

#### 岡室

主な視聴者が女性になっていくことと、女性の活躍が社会的背景にあると思うが、なぜ父を不在か弱体化させるのか。それが講演の起点だった。

#### 藤田

実際、戦後になり父親は生き方を変えなくてはいけなくなった。買い物くらいはする、休日くらいは家族と一緒にいるというのが新しい父親像とはいえ、ドラマの中では表現しにくい。家父長的な権限を振るってはいけなくてわかっているが、ではどうすればいいのかというモデルがないので、ドラマとして描けないのではと考えている。

#### 岡室

父の弱体・不要論は90年代のドラマで加速される。震災を機に「家族の絆」が言われるようになった時に、父はどうしたらいいかがテーマになる。『家政婦のミタ』（日本テレビ、2011年）は松嶋菜々子のキャラクターが鮮烈だったが、父の再生の物語。その後、再び潮が引くようにまた父が弱体化した。

#### 笹山

鴨下の父親像について「戦争した父」「失敗した父」を戦後どう描くかの議論がある。戦後、新劇で菊池寛『父帰る』が流行したのは、父を許すかどうかテーマだったからではないかと鴨下は言っていた。敗戦後、父をどう語るかは敗戦の問題と絡んで議論せざるを得ない。大島渚は父の復活への恐怖と不在の不安を描いた。その後こっそりと復活し、「王に見えない王」「大衆に選ばれた王」と違う形の父親がドラマに登場する。森繁久彌や船越英二の名前を挙げていた。敗戦の文脈で父親の描き方を考えることが必要と感じる。

#### 丸山

近年ドキュメンタリーに描かれる父はパラレルかと思った。「帰ってきたら全然違う人になっていた父」たちが日本の各地にいた。強い父しかいなかったように考えられてきたが、戦争により不在、あるいは戦地から帰ってきた父は実はPTSDに苦しみ別人になってしまった。その父親像をどう捉えるのか、答えが出せない中で複数の回答がドラマの中で出されていた。

#### 岡室

戦争中も不在、戦後いなかったも同然の父。それは天皇制の問題と切り離せないと考える。戦争の責任を誰が何に對して取るのか曖昧なまま今日に至っている。日本社会は空虚な中心によって成り立っているところがある。PTSDになっても当時言葉もなかった。全部を個人の問題に帰されてきた。日本社会の根源的な問題を実はホームドラマは照らしているのではないか。

#### 藤田

制作の中で戦後をどこまで意識するか。70年代と80年代は全然違うと感じている。『俺たちの旅』（日本テレビ、1975年）は戦後を引きずっている。80年代は戦争を言及しない。

#### 岡室

笹山氏の講演で、テレビ制作者の証言に触れて面白かった。ホームドラマは「つまらない」「予定調和」と考えていたが、橋田財団から講演依頼があり『渡る世間は鬼ばかり』（TBS、1990年）を改めて見たら、予定調和ではなく、家族間の問題がボコボコ起こるが何一つ解決しない。その解決しないことをエネルギーにしながら進む。橋田先生すごいと再認識。現在『おしん』（NHK、1983年）の再評価をしようと思っている。マスキュリティやマチズモへのアンチドラマであった可能性がある。

『ありがとう』（TBS、1970年）『胆っ玉かあさん』（TBS、1968年）など、視聴率50%を超えたドラマの何が視聴者を惹きつけたのか。分かりやすい面白さではなく、人間の意識に働きかける何かがあったのではないかと今振り返るから見えてくるものと、当時の証言を緻密に収集して立ち上がってくるものをどう結びつけていかにテレビ研究の面白さである。

#### 笹山

ホームドラマで豊富な議論ができ、テレビドラマ史が描けるのではないかと感じた。楽しく有意義な時間だった。



会場からも多くの質疑が寄せられ笑顔で応える登壇の先生方



笹山氏 岡室会員 藤田氏 司会の丸山会員

長時間にわたる研究会となったが、約30名の参加者が熱心に視聴・聴講した。

（すぎた このみ／ドキュメンタリードラマ研究会代表、専修大学）  
（なかがき こうたろう／ドキュメンタリードラマ研究会、専修大学）

# アジア映画研究会

石坂 健治

●公開イベント：中国ドキュメンタリー『UNVOICED』特別上映とトーク（第3期第31回（通算第64回））

会期：2026年1月31日（土）13時～15時

会場：日本映画大学 新百合ヶ丘校舎 4階大教室

主催：日本映画大学

共催：日本映像学会アジア映画研究会

◎上映作品

北鹿監督『UNVOICED』（2025年、86分、日本語字幕付き）

◎トーク

アン・ニ（日本映画大学特任教授、本学会員）

石坂 健治（日本映像学会アジア映画研究会代表）

◎概要

2025年12月の東京ドキュメンタリー映画祭2025（長編コンペティション部門）に入選した話題作『UNVOICED』（監督：北鹿）の特別上映とトークを行った。本作はコロナ禍の日々を振り返る武漢の人々の声なき声を集めたインタビュー・ドキュメンタリーである。扱っているテーマに鑑みて、監督は同映画祭でのプレミア上映から一貫して欠席しており、タイトルのとおり作り手の直接の声がないままの上映となっている（監督からのメッセージを登壇者が代読）。今回は関係者のご厚意を得て、同映画祭以降の貴重な上映の場となった。トークは本学会員や日本映画大学の教員・学生と登壇者との間で活発な討議となり、コロナ禍での映画制作を描いているロウ・イエ『未完成の映画』（24）との比較、現在の中国でインディペンデント映画（独立映画）を制作する際の困難、そうした状況下で本作がつけられたことの意味を評価する意見とともに、撮る側と撮られる側の対称性について考える契機も提供され、ドキュメンタリーをめぐる本格的な議論に発展した。

※作品と監督についての詳細は東京ドキュメンタリー映画祭HPをご覧ください。

<https://tdff-neoneo.com/lineup/unvoiced/>

●公開イベント：コミュニティシネマフェスティバルvol.1「日韓映画館の旅」 関連企画～「1950年代韓国映画傑作選」（50s Korean Cinema Masterpieces）クロージング・トーク（第3期第32回（通算第65回））

会期：2026年2月21日（土）18時30分～20時

会場：アテネ・フランセ文化センター

料金：無料（通常は上映会チケット半券提示で入場のところ本学会員は不要）

主催：コミュニティシネマフェスティバル実行委員会

共催：韓国芸術映画館協会、日本映像学会アジア映画研究会

協力：韓国映像資料院（KOFA）

協賛：芸術文化振興基金助成事業、韓国映画振興委員会（KOFIC）

◎クロージング・トーク登壇者

四方田 犬彦（比較文化研究者・映画研究者）

崔 盛旭（チェ・ソンウク／映画研究者、本学会員）

石坂 健治（日本映像学会アジア映画研究会代表）

◎概要

韓国の国立映画保存所である韓国映像資料院（KOFA）は1974年に創設され、創設50周年を迎えた2024年、記念プロジェクトのひとつとして行われたのが「50/50韓国古典映画パッケージ」（1950年代韓国映画傑作選）の海外巡回事業である。その一環として、2025年から日本各地のミニシアターを横断したコミュニティシネマフェスティバルvol.1「日韓映画館の旅」のプログラムの一つとして「1950年代韓国映画傑作選」が東京でも開催された（2026年2月12～21日）。日本初上映となる『洛東江』をはじめ、

KOFAが収蔵する50年代の傑作7作品のデジタルリマスター版をまとめることができる貴重な機会であった。

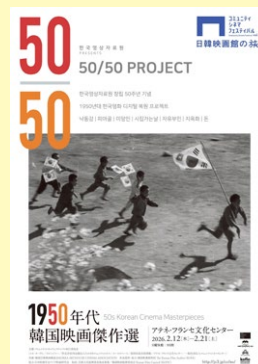
当研究会は最終日に行われたクロージング・トークを担当し、本学会員など3名がパネリストとして登壇した。『アジア映画とは何か』（みすず書房、2025）などの著書を持つ四方田犬彦氏からは、黄金時代を迎えていた同時期の日本映画との比較や、朝鮮戦争が休戦となって間もないこの時期に始動を始めた韓国映画界の底力についての言及があり、『韓国映画から見る激動の韓国近現代史』（書肆侃侃房、2024）の著者である崔旭盛氏からは、韓国の政治情勢がどのように映画に反映しているか、またこの時代を扱った新作映画はいかに歴史の読み直しにチャレンジしているか、という解説があった。当研究会の石坂は2人に補足する形で、本フェスティバル協力団体でもある韓国映像資料院が2025年にアンケート集計・発表した「韓国映画オールタイムベスト100」を示し、1950年代にキャリアを開始した申相玉（シン・サンオク）、兪賢穆（ユ・ヒョンモク）といった映画作家たちが揃って60年代に代表作を発表するに至る過程をたどった。多くの観客が来場し、質疑応答も活発におこなわれた。

※「1950年韓国映画傑作選」全日程は下記webサイトをご覧ください。

<https://athenee.net/culturalcenter/program/ko/50skoreancinema.html>

※コミュニティシネマフェスティバルvol.1「日韓映画館の旅」は下記webサイトをご覧ください。

<http://jc3.jp/ccfes/>



（文責：石坂健治）

（いしざか けんじ／アジア映画研究会代表、日本映画大学）

## 写真研究会

橋本 一徑

第15回の写真研究会が2026年3月27日に早稲田大学にて開催された。Cold War Korea Through the Lens of Kuwabara Shiseiと題する発表を行ったJi Hye Han氏（早稲田大学グローバルエデュケーションセンター助教）は、写真家の桑原史成による、彼の代表作である水俣での作品に比べて、あまり知られていない韓国で撮影された写真について、写真集『韓国原影』（1986年）に収録された作品を中心に、精緻な分析を繰り返した。福田真衣氏（京都大学修士課程）は、「最高のエリオグラフィ」とはなにか——中世考古学とミッション・エリオグラフィック」と題された発表を行い、19世紀前半のフランスにおける国家的撮影事業であったミッション・エリオグラフィックについて、同時代の新しい科学であった考古学との結びつきを中心に、新たな視点を提示した。

研究会の後半では、2025年に刊行された書物『ドキュメンタリー写真を発明し直す』（よはく舎、2025年）について、著者である田尻歩氏（東京理科大学講師）を迎え、同書の書評会を開催した。書評者を務めたのは土屋誠一氏（沖縄県立芸術大学教授）である。会においては、日本はおろか世界的にも研究の行き届いていないとは言えない、アメリカやイギリスや日本における、写真を用いた様々な社会参加的営みに着目した本書の学術的意義がまず確認されてから、時系列的な順序を逸脱した独特な叙述スタイルや、本書が取り上げる対象の中に中平卓馬が位置づけられることの奇妙さなどが話題となった。本書の第2部が主題とする「集団制作」は、病により自らのアイデンティティに揺らぎが生じた中平卓馬の制作にも、ある意味で当てはまる言葉であろう。つまり第1部の最後に置かれた中平についての章は、本書の第1部と第2部を蝶番のように結び付けて、「集団制作」が本書全体を貫く主題でもあることを示唆してくれている。こうした「集団性」に對置されるのが「作家性」であるとすれば、本書が描こうとするのは、写真を作家性に還元しようとしてきた歴史に対する、徹底したオルタナティブである。ダゲールやタルボット、バヤールなどにより、同時多発的に出現したテクノロジーである写真が、起源からすでに集団的であった歴史が思い起こされる。つまり写真のオルタナティブを問う本書は、大文字の写真の歴史の片隅に位置づけられるマイナーな事象を扱った書物ではなく、そこでは写真そのものが問われているということを、改めて確認することのできた場となった。

### 開催概要：

日本映像学会写真研究会 第15回研究発表会

場所：早稲田大学戸山キャンパス32号館128教室

日時：2026年3月27日（金） 15:00～18:30

・研究発表1（15:00-16:00）

Ji Hye Han (Assistant Professor, Waseda University)

Cold War Korea Through the Lens of Kuwabara Shisei

・研究発表2（16:00-17:00）

福田真衣（京都大学修士課程）

「最高のエリオグラフィ」とはなにか——中世考古学とミッション・エリオグラフィック

・書評会（17:15-18:30）

田尻歩『ドキュメンタリー写真を発明し直す』（よはく舎、2025年）をめぐって

田尻歩（東京理科大学講師）、土屋誠一（沖縄県立芸術大学）

司会：橋本一徑（早稲田大学）

（はしもと かずみち／写真研究会代表、早稲田大学）

## 映像人類学研究会

田淵 俊彦

映像人類学研究会 第11回報告書

### 開催概要：

・日時：2026年3月7日（土）14:00～16:00

・開催方法：対面（桜美林大学東京ひなたやまキャンパス）およびZoomによるハイブリッド開催

・申込者数：41名

・参加者数：32名（対面7名、オンライン25名）

### テーマと目的

第11回研究会では、映画『佐藤忠男 映画の旅』を監督した寺崎みずほ氏をゲストに迎え、作品成立の背景、映画評論家・佐藤忠男氏への長期密着取材の過程、さらに映像制作における観察・距離・倫理といった映像人類学的テーマを総合的に検討した。

寺崎氏は、桜美林大学卒業後、改めて日本映画学校（現・日本映画大学）で学び直し、その後NHK番組制作や文化庁事業などを経て長編映画監督となったキャリアの持ち主である。その多様な経路は、映像制作を志す学生や研究者にとって重要な参照点となる。

本研究会の目的は、寺崎氏が佐藤忠男氏に密着した3年間の取材を手がかりに、

- ・観察・距離・倫理の問題
- ・異文化理解と記録の方法
- ・批評史・映画史の交差
- ・キャリア形成の多様性

を再考し、映像人類学研究と制作実践の双方を深めることである。

### ゲストスピーカー略歴：

寺崎 みずほ (TERASAKI Mizuho)

映画監督・ドキュメンタリーディレクター

1985年、神奈川県川崎市生まれ。桜美林大学英米文学科を卒業後、改めて日本映画学校（現・日本映画大学）に入学。2010年に映画学校を卒業後、映像制作会社グループ現代で勤務し、NHK番組や文化庁フィルム制作事業など多様な現場を経験した。

2015年、NHK・セルフドキュメンタリー『極私的ドキュメンタリー っぽんリアル 私とおさなじみ』でディレクターデビュー。その後もNHK「ハートネットTV」「介護百人一首」「きょうの料理ピギナーズ」など、福祉・教育・生活文化領域の番組を多数演出。

長編映画の監督作品としては、本研究会で扱った『佐藤忠男 映画の旅』が初となる。

文化庁記録映画『細川紙』（2014）演出助手、NHK大河ドラマ紀行『真田丸紀行』（2016）演出、また教育映像『中国高校生日本語作文コンクール』なども手掛け、ドキュメンタリーから教育・福祉まで幅広いジャンルで活躍している。

### 当日のプログラム：

14:00～ 開会の挨拶・第1～10回の活動報告

14:15～ ゲストスピーカー・寺崎みずほ氏とのトークセッション（司会：田淵）

15:15～ 質疑応答

16:00 終了

内容と議論の展開：

前半1時間は田淵が聞き手を務める形式で進行した。以下のテーマが主要な論点となった。

- ・大学時代の経験と学生としての姿勢
- ・桜美林大学卒業後に日本映画学校に入った理由
- ・佐藤忠男氏との関わり、取材を始めたきっかけ
- ・映画制作を志すようになった背景
- ・インド取材の旅とそこで直面した困難や学び

寺崎氏は、自身のキャリアが直線的に形成されたのではなく、学び直しや現場経験の積み重ねが大きかったと強調。佐藤氏への長期取材では「急かさず、待つ」という姿勢を重視し、沈黙を含めて被写体と向き合う方法論が語られた。

後半では、対面参加の学生を中心に多角的な議論が展開された。桜美林大学・田淵ゼミの学生からは、制作実践に直結する具体的な質問が多く寄せられた。

学生からの主な質問は以下である。

- ・AIを映像制作に使うことの是非

寺崎氏は、AIの発展を否定しない一方で、ドキュメンタリーの核には「人と人が向き合うことで生まれる揺らぎや迷い」があると指摘した。AIでは置き換えられない、人間固有の観察・感情・関係の生成こそが作品になる、と応答した。

- ・テーマの見つけ方

「違和感を覚えた出来事や、引っかかった出来事を長く追う」ことが取材の源泉になると述べ、現場で“待つ”姿勢の重要性を強調した。

- ・今後つくってみたい作品について

長期的な観察の中で人物と歴史が交差する作品を、引き続き掘り下げたいという意欲が示された。

研究会終了後のアンケートから寄せられた意見の多くは、映像制作そのものを「人と人が協働し合う行為」と捉える視点に基づいており、寺崎氏が語った“待つ姿勢”や“沈黙を受け止める態度”と強く響き合っていた。

事前視聴作品『BUTAYA』への反応では、家族が背負う時間の重さや決断を誠実にすくい上げる寺崎氏の方法が高く評価され、初期作から現在の作品に至る流れの連続性が自然に語られた。また、作品内で佐藤忠男氏が“戦争”について語る際に使った「ごまかし」という言葉については、文字や映像では完全に表現しきれない葛藤が浮かび上がるという感想が多く、これが「記録すべきは、むしろその言葉にならない領域ではないか」という考察へとつながっていった。

さらに、映画『佐藤忠男 映画の旅』そのものについては、「評論家を対象としたドキュメンタリーとして野心的」「理論ではなく“生きている佐藤氏”を掘り上げていた」といった批評的視点のコメントが相次いだ。なかでも、佐藤氏の理論はAIによって要約できるとしても、この映画が記録した“理屈ではない側面”はAIには作れないという指摘は、既存の制作観と新しい技術環境との関係まで踏み込むものであり、学生の質問と研究者の観点が交差する象徴的な議論となった。

これらのやり取りを通して、観察・距離・倫理・記憶・沈黙といった映像人類学の基幹テーマが多面的に掘り下げられ、対面とオンラインの双方が相互に刺激し合う、豊かな対話の時間となった。

総論：

第11回研究会は、申込41名・参加32名と十分な規模で実施された。今

回はオンライン参加者に大学教員や研究者が多く、議論全体が前回以上に理論的・批評的に深まる傾向が顕著であった。

寺崎氏の語りは、

- ・長期取材における倫理的な姿勢
- ・“待つ”という行為がもたらす関係構築
- ・対象の語りと沈黙を受け止める感性
- ・映像化できない領域にどう向き合うか
- ・観察者としての距離の調整

といった核心に触れ、参加者に大きな示唆を与えた。

学生による具体的な率直な質問と、オンライン参加者から寄せられた理論的・批評的な視点が、それぞれ別の経路で提示されたことで、研究会全体の議論が多層的に深まった。対面とオンラインという異なる参加形態がもたらす関心の幅が、制作実践と学術的考察の両面を照らし出し、本研究会の価値をさらに高める結果となった。

今後の課題と取り組み：

- ・上映作品と研究会テーマをより強く連動させ、制作・理論両面からの議論を深める場づくりを継続する。
- ・映像制作の現場での観察方法・倫理・距離の問題を、継続的に議論するプログラムを強化する。
- ・学生や若手研究者の育成を目的としたワークショップや制作実習との連動を検討する。
- ・国内外の映像文化史・批評史と結びつけた研究会を継続し、上映・講演・取材報告など多様な形式を取り入れる。

以上

(たぶち としひこ／映像人類学研究会代表、桜美林大学)

# 映像玩具の科学研究会

橋本 典久

映像玩具の科学研究会 第7回 謎の装置Kaleidoscopic Colour-Topを考える

映像玩具の科学研究会は学習院大学を会場として、[謎の装置Kaleidoscopic Colour-Topを考える]を開催しました。

1858年ごろイギリス人の医師ジョン・ゴラムが考案したカレイドスコピックカラートップ。回転する彩色独楽(Colour-Top)の上にスリットが空いた円盤を載せると、多様な変化を伴って見えるらしいという謎の装置でした。スリット円盤外側からは糸が垂れ下がっているの、独楽の回転よりも少し遅くなり…というのですが、全くイメージができませんでした。

本研究会の発起人でもある草原真知子氏のコレクションを撮影中に実物を発見し、装置の構造がわかったことから研究会で取り上げることにしました。

## 開催概要

- ・日時 2026年3月30日(月) 11:00～17:00
- ・会場 学習院大学西5号館3階301教室
- ・協力 学習院大学文学部佐々木果研究室
- ・参加者 研究者、大学教員、作家など19人

## 進行内容

- ・学習院大学見学ツアー
- ・あいさつ/参加者自己紹介
- ・Kaleidoscopic Colour-Top実物の紹介(草原コレクションより)
- ・キット配布、組み立て、取り扱いの練習
- ・ベース面の色プレートの説明
- ・スリット盤の紹介、糸についての説明
- ・ゴラム論文抜粋紹介
- ・ハート型、ギザギザ型のプレートの役割を考える
- ・混色問題を考える
- ・実験
- ・班ごとに判明したことを発表

## 参加者の感想(抜粋)

- ・ゴラムの色彩コマに触れて、装置に対する疑問点をすぐさま自分で確かめることができ興味深い体験となりました。二枚の種板(?)のうち、上側の速度を変えさせるための紐や息を吹きかける行為など、デジタル・メディアのオン・オフに慣れ過ぎた現代の我々にとって、物理的世界の些細なノイズをうまく取り入れていることに改めて驚かされます。
- ・ベンハムのコマなどの\*\*継時加法混色\*\*も人によって見える色が変わることを考えると、これについても同じことが言えるのだろう。色については書かれている論文なども多いけれど、人による見え方の差異というものがかかなり大きいものであることは間違いない。個人の身体的構造の差異だけではなく、文化的背景によっても意味が変わってくるので、それも見え方に差を作っている一因なのだと考える。動画でうまく撮影できないこれらの現象は、VRなどでは体験できない直接的な身体的体験として、面白い研究対象であるだろうと思う反面、制御が難しい(人によって見え方が違う)ということは、なんとも扱いづらいものでもあるなと考えた。

・今までの研究会の中でもかなりシンプルな仕掛けの装置で、それでいてかなり奥深くて工夫次第で様々なメディアエンジニアリングができそうな興味深い装置でした。撮影した映像では見られず、実際に試してみなければ見ることができない現象を体験できた。またグループ形式で進むので、メンバー同士で意見を出しながら考えていくため、一人では気づかない点も把握できて非常に有意義だった。

・保管資料から実物を見つけ、今回の実施につながったという経緯も含め、とても意義のある取り組みだと感じました。私は大学で映像制作の技術を担当している教員ですが、制作技術だけでなく、「どのように見えているのか」という知覚の問題についても、実際の体験を通して考える機会を授業に取り入れていきたいと思いました。さまざまなバックグラウンドの研究者が、グループワークによる意見交換、試行錯誤を重ね、思考・検討を行うことには、歴史研究としての新たな広がりを感じました。

・非常に興味深いワークショップでした。山崎さんの作成したキットは外箱を含め、よくデザインされていたので、機能上も実用的なものに仕上がっており、このままワークショップ用の製品として販売できそうだと感じました。

・皆さんと実際にレプリカを組み立て、観察し、仕組みを議論するという行程は、他の場では体験することのできない非常に有意義な時間でした。所属先施設でも映像玩具や装置を所蔵していますが、作品として慎重に取り扱う必要があるため実際に動かすことは難しく、その一方で、レプリカを制作したり展覧会に出品し解説を書いたりするにも構造を理解することが不可欠で、作品として収蔵してしまったがためのジレンマを抱えています。研究会に参加することで、類似する収蔵作品の構造や背景の理解に繋がり、また、同じ興味を持つ研究者・参加者の皆さんとの関係性も構築することができ、非常に貴重な経験を得ることができました。

・皆さんと共に「謎」に満ちたKaleidoscopic Colour-Top映像装置の解明に携われたことは、映像研究の観点から非常に有意義な経験となりました。所属先施設には膨大な映像作品がありますが、収蔵品という性質上、安易に組み立てたり触れたりすることはなかなか難しいです。美術館側の人間として、収蔵品をいかに利活用し市民に開くことと、学術的な研究用ワークショップの境界線については常に模索しています。今回はイギリス製の映像装置が中心でしたが、アジア圏においてこうした装置がどのように展開していったのかについても、知見を深めていきたいと考えています。

・映像玩具と呼ばれるものは、一般的には「映画や映像の歴史を考える上での原点」というとらえ方が多いかと思いますが、私も以前はそのような見方でしかとらえていませんでしたが、そのような歴史観はある面で「映像玩具」そのものが持っていた広い可能性や多様な論点を見落としてしまうものであると感じます。映画史の文脈からいったん離れ、改めて19世紀のさまざまな実験のポテンシャルに直接向き合うことは、視覚文化全般を検討する上で重要な作業であることを、今回のワークショップからも感じました。

・「経験」と「現実」のギャップは、広く表象文化論などに共通する問題設定だと思いますが、このような映像玩具の場合は、絵やモニター越しの映像のようなRepresentationではなく、単に目の前に起きている現実として経

験されるという点で、容易には語りきれない種類のギャップであり、視覚にとってより根本的な問題なのだとことを再認識しました。特に色に関しては、きちんと勉強する必要性を感じました。(とりあえずゲートを読まなければ……というのが、今回のワークショップを終えた私の心境です)

・いわゆるアニメーションの効果だけではなく、混色、錯覚、モアレ、回転そのものの魅力など、様々なものが未分化のまま融合している玩具のように思われました。その意味では、視覚実験の道具としては完成度が低く、後の世に伝わらなかったのもわかるような気がします。しかしながら、現在の目から見れば、未分化ゆえの面白さがあり、改良を加えて安定性を高めてみたいような気がします。一つ気になるのは、スリットの動きです。独楽よりもゆっくり回っているのではなく、間欠運動をしている可能性もあるのではないかと思います。

・最初は、はたしてコマを廻しながら混色を見るというだけではたしてどれくらい楽しめるのかと、期待と不安が入り交じった状態でしたが、コマの上部に色板とスリットを二段で取り付け、しかもスリットの速度を遅らせるという凝った仕組みのおかげで、複雑な現象を体験できました。目でも頭でも楽しみ、数時間があっという間でした。山崎さんの作られたキットがじつによくできており、耐久性にも優れていたおかげで、安定したコマの回転が得られ、次々と新しいアイデアを試すことができたのが特にすばしかったです。

#### 橋本の総括

彩色独楽の上に糸が付いたスリット盤を載せると回転スピードが変わり、万華鏡のような効果がでるという解説文を読んだときは、まさかと思ったが、実際に実験してみると確かに回転比が変わっていることが確認できた。糸の端が机にこすれる摩擦によるものと思われたが、糸を短くして机から浮かせても、糸をスリット盤の反対側につけて重心のバランスをとってもこの現象は起きることが参加者から報告された。また、色の混色について、加法混色や減法混色とも違う混色(平均混色?)が提示された。ただの万華鏡のようなキラキラした像が見える独楽くらいかと思ったが、予想外に深い装置だということがわかった。ゴースムは心棒の直径：スリット盤の穴の直径は3:4が良く、このとき独楽とスリット盤の回転比は5:1になるというが、研究会としては未検証である。追加の実験を行い、検証していきたいと考えている。

キット制作を引き受けてくれた山崎翔太氏と会場を提供していただいた学習院大学文学部佐々木果先生に感謝いたします。

#### 次回予告

第8回映像玩具の科学研究会は、9月末頃に「夏の終わりの自由研究報告会」を実施する予定です。

(はしもと のりひさ／映像玩具の科学研究会代表)



## 関西支部

大橋 勝

2025年12月14日(日)、京都大学吉田南キャンパスにて日本映像学会関西支部第104回研究会が開催され、2件の研究発表が行われた。

●ライナー・ヴェルナー・ファスピンダー映画における作家の反映 — 『聖なるパン助に注意』(1970)と集団制作を通じて

角田哲史会員 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程

●ギー・ドゥボールの映画におけるニュース映画の「転用」 — 60年代初頭までの作品を中心に—

武本彩子会員 大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程



角田会員の発表は、西ドイツの映画監督ライナー・ヴェルナー・ファスピンダー『聖なるパン助に注意』(1970)を論じることで、ファスピンダーの作家論を再考するものであった。ニュー・ジャーマン・シネマ研究の主流が、ファスピンダーのキャリア後期、西ドイツ三部作を中心に、戦後ドイツに対するこの作家の認識と不可分に論じられてきた。これに対し、発表者はファスピンダーがキャリア初期に主催していたアンガラ劇団アンチテアターにおける活動に注目し、自身の生や欲望、思想を表出する彼の映画作法に迫る。『聖なるパン助に注意』は、映画制作現場が舞台となっており、監督の自己認識が反映されていると指摘する。その上で、この映画におけるファスピンダーの自己反映は、近代的な映画作家としてのアイデンティティの表出ではなく、劇団員たちとの集団制作、コラボレーションによる制作過程そのものの反映であることを発表者は読み解いた。

武本会員の発表は日本では主に思想家、『スペクタクルの社会』(1967)の著者として知られるギー・ドゥボールの映画作品について、その手法と思想について考察するものであった。ドゥボールの映画は6本あるが、その大部分は既存の映像を元の文脈から切り離して再使用する「転用」で構成されている。これらの映画には、政治／芸術運動グループ「シチュオアニスト・インターナショナル」の中心にいた作家の思想がはっきりと打ち出されている。彼の「転用」にはニュース映画が多く用いられているが、発表者は元となる報道映像を特定し、その選択に込められた作家の制作意図や批評を読み解こうとする。

発表者の分析した『かなり短い時間単位内の何人かの人物の通過について』(1959)と『分離の批判』(1961)の制作時期は、フランスがアルジェリア独立戦争に直面していた時期に重なっており、作中で多用された、各国での民衆デモと警察・軍が衝突する報道映像や、コンゴ共和国の動乱を報じる映像からは、当時報道が規制されていたアルジェリアでのフランス軍による暴力を想像させ、さらにアフリカ諸国の独立後もなお続く植民地主義に対するドゥボールの懸念が具現化されていると考察する。

両発表とも興味深く、時にスリリングな論が披露され、質疑応答においても活発な議論が行われた。研究会終了後、同会場にて2025年度日本映像学会関西支部総会が行われ、2025年度活動報告、2026年度活動計画が提案され了承された。



## 中部支部

齋藤 正和

2026年3月7日(土)、大阪大学豊中キャンパスにて日本映像学会関西支部第105回研究会が開催され、2件の研究発表が行われた。

### ●冷戦期の東欧アニメーションにおけるシュルレアリスム——理念の再構築と実践

馮一夫会員 京都芸術大学大学院博士後期課程

### ●『アメリカン・ストーリーズ 食事・家族・哲学』におけるディアスポラの表象——食事と独白の場面についての考察

橋本知子会員 大阪大学大学院人文学研究科芸術学専攻アート・メディア論コース博士後期課程

馮会員の発表は、冷戦期東欧のアニメーション作家たちが、アニメーションにおいて、シュルレアリスムの理念および技法をいかに再構築し創作へと転化させたのかを、何人かの重要な作家たちを手がかりに検証するものであった。発表者は東欧アニメーション作家とシュルレアリスム運動との歴史的関連を、「非自覚型」「間接型」「直接型」に分類し、国・地域ごとの特徴と結びつける。

更に「オートマティスム」「コラージュ」「デペイズマン」などシュルレアリスムの技法や概念が、アニメーション表現の中で改変され、「変形」や「生命付与」といったアニメーション固有の特性と結びつき強調されていった経緯を分析する。そして、精神の探求であったシュルレアリスムが東欧アニメーションにそのまま継承されたわけではなく、現実世界への関心を取り込み、現実経験および近代文明に内在する非合理的構造の露呈へと移行していると発表者は結論づける。

橋下会員の発表は、シャンタル・アケルマンの長編映画『アメリカン・ストーリーズ 食事・家族・哲学』(1988)を取り上げ、彼女がユダヤ系ディアスポラとしてのアイデンティティをどのように映画表現として構築したかについて考察するものであった。アケルマンは戦後生まれであり、ホロコーストを直接経験していないが、母が生涯抱え続けたアウシュヴィッツの記憶の影響を強く受け、1970年代以降、彼女はディアスポラや移民を主題とする映画作品を制作する。

『アメリカン・ストーリーズ』はドラマ的な出来事の展開はほとんどなく、登場人物たちの独白と孤立した食事シーンなどで構成されている。その内容はアイザック・バシェヴィス・シンガーの文学作品やユダヤ系新聞の投稿を下敷きに脚本が構成され、東欧系ユダヤ人の俳優によって独白が演じられている。この独自の演出によって集合的な記憶のあり方が、演劇的で密度の高い映像空間の中に表現されていると発表者は評価する。同じ場所に集いながらも食事を共有せず、孤立した語りは、移民後の社会における共同体の分断を象徴すると同時にユーモアやユダヤ的伝統も反映していると考えられる。共有されない食事や、噛み合わない語り、空間の不確かさなどによって、本作品はディアスポラを物語として説明するのではなく、不安定な構造によって暗示していると発表者は指摘する。

両発表とも活発な質疑応答が行われ、今後の研究の発展に資する議論が展開された。



(おおはしまさる／関西支部、大阪芸術大学)

<報告>

2026年3月13日(金)名古屋学芸大学にて2025年度中部支部第3回研究会が開催された。今回は、9校・15作品による学生作品のプレゼンテーションが行われた。

2025年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第3回研究会

日時：2026年3月13日(金) (13:30 開始)

会場：名古屋学芸大学 メディア造形学部棟 MCB210教室

開催方式：対面

### ◎学生作品プレゼンテーション

発表者(発表校順)

#### ●愛知県立芸術大学

《都市の皮膜》3分15秒 | インスタレーション

小此木 玲奈(美術学部メディア映像専攻 3年)

《隣の席の山田くんは殺人鬼》25分 | 映像作品

鈴木 絢子(美術学部メディア映像専攻 4年)

#### ●愛知淑徳大学

《展示名：分裂過程》《映像作品名：2つの視点 / 見んな、みんな》7分43秒

| 映像作品 深尾 心乃、福田 蜜葉(創造表現学部メディアプロデュース専攻 2年)

《べ展》10分29秒 | インスタレーション 坂崎 和日子、松尾 茉音、内藤 桃

香、波多野 皓丈(創造表現学部メディアプロデュース専攻 4年、創造表現学部創作表現専攻 4年)

#### ●静岡文化芸術大学

《キラキラのクーターナル》| 3分02秒 | アニメーション

藁科 楓(デザイン学部デザイン学科 4年)

#### ●情報科学芸術大学院大学(IAMAS)

《Tide Lines》| 69分00秒 | 映像作品

山崎 春蘭(メディア表現研究科 博士前期課程 1年)

#### ●中部大学

《挫折と対抗 監督 白井湧宇と主演候補だった人物の対話》| 8分19秒 |

映像作品

白井 湧宇(国際人間学研究科言語文化専攻 修士 2年)

#### ●名古屋学芸大学

《幻影の揺らぎ》| 6分49秒 | 映像作品

岩田 直樹(メディア造形研究科 修士 1年)

《IDEAL ↑ ↓ I Δ EA》| 4分44秒 | 映像作品

武馬 由季(映像メディア学科 4年)

《隠喩》| インスタレーション

辻 星哉(映像メディア学科 4年)

#### ●名古屋芸術大学

《スーパー銭湯館ひのまる》| 25分 | アニメーション

小泉 春歌(デザイン領域イラストレーションコース 4年)

## 西部支部

趙瑞

## ●名古屋市立大学

《ハンさん》 | 6分30秒 | 映像作品

XUE PINGLIA (芸術工学研究科 修士 1年)

《空き家の中で》 | 5分37秒 | 映像作品

YANG YUNLIN (芸術工学研究科 修士 1年)

## ●名古屋文理大学

《おもいびと》 | 4分27秒 | 映像作品

江口 晴、西村 帆乃佳 (情報メディア学部 2年)

《演者》 | 5分34秒 | 映像作品

松野 太一 (情報メディア学部 3年)

学生作品プレゼンテーションでは、会場のスクリーンを使用した作品上映を実施した。例年通り、研究会開催の約10日前から、作品（動画）をまとめた特設サイトをオンラインで公開し、参加者が事前に視聴できるようにした。作品は、実験的な映像作品、アニメーション、ドキュメンタリー、長編ドラマ、展示プロジェクトなど、多岐にわたり、表現手法も多様であった。

当日は、40名を超える参加者があり、会員や他校の学生から質問や感想が寄せられ、発表した学生にとっても、指導にあたった教員にとっても有意義な場となった。研究会後に行われた懇親会でも、会員と学生が活発に交流した。

なお、研究会開催前に行われた幹事会では、理事会での話題が共有されたほか、来年度の担当校やスケジュールが確認された。

(さいとうまさかず / 中部支部代表、名古屋学芸大学)

西部支部では、2026年3月29日（日）に2025年度西部支部研究例会および支部総会を九州産業大学芸術学部にて開催した。

本研究例会では、1件の研究発表が行われた。

研究会終了後、同会場にて2025年度西部支部総会を開催し、今年度の活動報告を行った。

&lt;2025年度 西部支部研究例会概要&gt;

・日時：2026年3月29日（日）15:00開始

・会場：九州産業大学芸術学部17号館6階 デジタルラボ601

◎口頭発表（1件）

・西谷郁（福岡インディペンデント映画祭国際担当）

発表タイトル：

短編映画とは何か？現状と課題

要旨：

2020年代に入りSNS動画が活況を呈する中、様々な短編映画の傾向と特徴が見えてきた。典型的なドラマからネットのトレンドをいち早く取り入れたものなどに分類される。プサン国際映画祭や福岡インディペンデント映画祭などの事例から今後の短編映画のあり方を展望する。

発表終了後、短編映画の現状について活発な意見交換が行われ、参加者にとって知見を広める有意義な機会となった。

(ちょうるい / 西部支部代表、九州産業大学)

## FROM THE EDITORS

## 編集後記

総務委員会 常石 史子

会報 206 号をお届けいたします。学会組織活動報告を主とする今号には、3つの委員会、12の研究会、3つの支部からそれぞれ充実した報告が寄せられています。

VIEW展望欄には、実験映画や前衛映画に造詣が深く、そうした作品へのアクセス可能性を高めるための活動にも積極的に取り組んでおられる阪本裕文会員にご寄稿をお願いし、過去10年ほどの日本における実験映画やビデオアートのアーカイブ化を通観するご論考をお寄せいただきました。一定程度確立された商業映画の製作・配給・興行のシステムには必ずしも乗らないような作品群においては、個々の作品のアクチュアリティを更新しつづけるために、積極的なアーカイブ化とアクセス可能性の担保がことさらに重要であることを改めて考えさせられます。

5月30日・31日には、第52回全国大会が愛知淑徳大学長久手キャンパスで開催されます。「アート&テクノロジーの現在地を問う」シンポジウムにおいても、多数の応募が寄せられている研究・作品発表においても、昨今の激動する社会状況を鋭く反映した大会になるものと期待しています。

今期の総務委員会による会報の編集は、ひとまず今号で終了となります。毎号の実務的な編集作業は事務局主導で進めていただけのため、編集担当の委員の主な仕事はVIEW展望欄の執筆依頼でしたが、毎号、こちらの期待に違わぬ貴重な論考をお寄せいただくことができ、編集担当冥利に尽きる2年間でした。お世話になった皆様に心より御礼申し上げます。

(つねいしふみこ / 総務委員会、早稲田大学)